

NO. 71
AUTUMN
1980

英語展望

ELEC BULLETIN

特集：評価——そのあり方と
実践研究

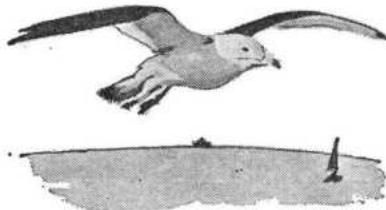


英語展望

NO. 71
AUTUMN
1980

ELEC BULLETIN

Edited by Natsuo Shumuta and Akira Ota
The English Language Education Council, Inc.
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo



【特集】評価——そのあり方と実践研究

情報サービスとしての評価のあり方.....	松川禮子	7
ランゲージ・ラボラトリー教育改革案.....	河野守夫	11
クローズ・テスト.....	伊藤弘子	15
最近の英語（言語）能力テストの傾向.....	野口 肇	19

【国際展望】

シンガポール再訪.....	福田陸太郎	2
国際的視野に立っての英語とその教育.....	福田 勝	4
感嘆文の現実と学校文法.....	外山敏雄	30

【連載】

アメリカの人種と民族（II）.....	國弘正雄	21
漱石のロンドン（その7）.....	伊村元道	26
日常英語の常識 3：John Doe と Simon Legree	矢野文雄	32
アメリカン・フォークロア（4）.....	倉田好子	34
Native Americans 10：これからインディアン教育.....	山本昭・吉見子	36

【英語教育の情報と資料 12】

三種の新教授法に対する一つの見方.....	田中春美	39
-----------------------	------	----

【新刊書評】『新しい英語学習指導』.....

名和雄次郎 43

新刊紹介.....

45

表紙デザイン

太田英男

新刊案内.....

47

展望通信.....

48



シンガポール再訪

福田 陸太郎

昨年の夏、数人の東洋史の学者といっしょに、私はシンガポール・マレーシア地域へ、いわゆる〈文化摩擦〉の実地調査に赴いた。これは文部省の科学的研究費によるもので、学術的な正式の報告書は別に出されるから、ここでは、私が久しぶりで再度訪れたシンガポールについて、こぼれ話のようなものを書いてみようと思う。

シンガポールに滞在中のある日、私は暑い日盛りの中を、MPHという本屋へ出かけた。目抜き通りのオーチャード・ロードの延長であるスタムフォード・ロードに面したこの町最大の本屋の一つである。マレーシアン・パブリッシング・ハウスの頭文字をとった略称だが、タクシーの運転士はよく知っていた。そこで、私はたまたま目に付いたサマセット・モームの『マレーシアン・ストーリーズ』と『ボルネオ・ストーリーズ』を買った。

MPHから歩いて10分位のところに、海岸に面したビーチ・ロードに、ラフルズ・ホテルというのがある。シンガポールの港を開いたスタムフォード・ラフルズ卿(Sir Stamford Raffles)の名をとった由緒あるホテルで、英國の植民地時代を思わせる宏壮で瀟洒なたずまいを見せ、まわりの生垣に、上から柔らかい長い草が一面にすだれのように垂れているのが、先ず私の目についた。そのホテルの一隅にあるラウンジへ入って、私は一息入れた。

外光を背に建物の中へ踏み込んだ私の目にはうす暗く見えたが、そのラウンジの壁に、ダーツの標的が2つ掛けてあり、それに向かって1人の若者が矢を投げていた。「コブラ」という英語の文字が、的と的の間に書いてあったが、それはこの遊びの名前らしい。ちょうど手首を曲げるようにして矢をとばすので、手首の形が、コブラが鎌首をもたげるかっこに似ているから、この名前をつけたのだろう、と私は想像した。

中年のマレー人らしいウェイターが近づいてきたので、飲み物を注文した。天井が高く、各部屋がひろびろしていて快適なのが気に入って、サマセット・モームがこの

ホテルを愛用していたことを聞いていたので、私はそのウェイターに向かって、“Somerset Maugham was here?”となにげなしに聞いてみたら、彼は“Yes. Summer is warm here.”と答えた。私は“I mean Somerset Maugham.”と言って、もう一度このイギリス作家の名前をくり返したが、相手は涼しい顔をして、同じ答えをするだけであった。この有名な作家の名前も、彼にはピンとこなかったようだ。モームさんもここでは、古き良き時代の人物になり果てたらしい。

ホテルの中はさすがに広く、中庭やプールがあり、高級な調度のレストランもいくつかあった。廊下の一部が、名店街のようになっていたが、全体として閑散とした感じであった。1800年代初めに〈中食を供する家〉(tiffin-house)として始まった所だというが、正式なホテルの形態をととのえたのは1886年のこと。受付のカウンターのうしろの壁に、創立90年記念の催しをしたときのポスターが貼ってあった。

サマセット・モームが、このホテルは“stands for all the fables of the exotic East”と言ったとか、オーディヤード・キブリングのアドバイスとして“Feed at Raffles when visiting Singapore”というのがあるとか、このホテルの案内パンフレットに書いてある。玉突きのテーブルの下で、虎が一匹射殺されたという話も伝わっている。ビーチ・ロードにかかっていたショーから逃げ出した虎であったそうだ。このホテルは第二次大戦中ひどい爆弾を受け、日本軍がシンガポールへ侵入したときは、避難民で一杯になり、1942年2月15日にシンガポールが陥落してから1945年まで、日本の高級将校たちの宿舎になったという。1945年9月12日の解放直後は、ジャヴァその他の地域の収容所からもどった人たちのいこいの場所となり、1946年から再びふつうのホテルとして開業した。誠に劇的な歴史をもつホテルである。

こういうふうに、ラフルズ・ホテルのことを親しげに語ると、私がそこに泊まっていたかのようにひびくかも

しれないが、とんでもない。科研費の限られた予算では、こういう超一流ホテルのラウンジで飲み物をとる位が関の山である。それでも私たち調査グループは、ちゃんとしたホテルであるミラーマーへ泊まっていた。

その晩、私はホテルへもどって、さっそくモームの『マレーシャン・ストーリーズ』の短編を読み始めた。最初に「4人のオランダ人」("The Four Dutchmen"), 次いで「東洋航路」("P. & O.")を一気に読んだ。現地にいるせいか、とてもおもしろい。P. & O. とは言うまでもなく船会社の名前である。それに、この本には、編集者アントニー・バージェス (Anthony Burgess) の序文がついていて、たいへん有益であった。

実は、この前日に、私はシンガポール港の南側にあるセントーサの島に、海洋博物館を見に行ったのであった。その一つの建物の壁に、世界各国の汽船会社のマークが色とりどりに掲げられていた。イギリスの P. & O. 会社もあったが、その黄・青・白の縞もようが目立っていた。その横に、青地に黒で、Mの字を2つ並べたメサジェリ・マリティムというフランス汽船会社のマークがあったのでなつかしかった。

1952年夏、ヨーロッパからの帰りに、私は M.M. 所属のラ・マルセイエーズという豪華客船で、このシンガポールへ寄港しているのである。寄港といつても、本当は修繕がおもな目的であった。

この真白な船体のオーション・ライナーは、地中海で思われぬ事故に出会った。ちょうどポートサイドに入港する直前、しけの最中に、流木にぶつかって、スクリューの片方をなくしてしまい、言わば片肺航行の姿で、エズ運河を通り、紅海を抜け、インド洋の長旅をつづけて、修繕に必要な乾ドックを備えた最初の港シンガポールへたどりついたのであった。ジョゼフ・コンラッドの『青春』に描かれている船みたいな惨憺たる状況ではないにしても、フランスの誇る5万トン級の客船にしては、醜態と言うほかはない。

うわさによると、このラ・マルセイエーズ号は、設計のミスか、巨大な船体にも増して不釣合にエンジンが強力だったために、震動が烈しく、デッキのテーブルの上で物を書こうとしても、旨く行かなかったことを思い出す。この航海のあとも、いろんな故障が重なったのだろう、何年かたって、この豪華船が解体されたことを、風の便りに聞いた。

さて、このとき、乾ドック入りしてスクリューの修繕を要した日数が3日間で、私はこれを幸い、乾上ったようになっている船底を眺めたり、港のあちこちに突き出している桟橋をひと巡り歩いてみたりした。折よく氷川



サマセット・モームが愛用したというラフルズ・ホテル

丸(12,000トン)が日の丸の旗をひるがえして入港していた。甲板へ上って、日本の船員と話したり、梅ぼしをもらってきたたりした記憶がある。シンガポール見物も一応することができた。

それから27年後、再びシンガポールを訪ねた感慨はひとしおであった。セントーサの島には、日米両軍の死闘を示す資料を収めた建物もあった。その島へ渡る高架のケーブルカーの窓越しに、昔のドライ・ドックがあるかしらと、目をこらしたが、船のマストの林立を見るだけであった。

近くにクリフォード桟橋というのがあって、島めぐりの遊覧船の発着所になっている。その辺の買物横町として知られているチエンジ・アレーを歩いていたら、日本の海軍みたいな服装をした若者たち数名に会った。鹿児島大学の水産学部の学生たちで、実地訓練のため鹿児島丸という船にのって、オーストラリアからインド洋をまわり、ここへ寄港、あと4,5日で帰国すると言っていた。

私の乗ったバスのガイドの説明によれば、シンガポールは現在、横浜に次ぐ東洋第二の殷賑な港で、船が平均15分ごとに1隻ずつ出入していると言う。この港の盛んなことや、いろんな人種の出会いの場所であることは、モームの『東洋航路』の冒頭にも書かれているが、シンガポールの港も町も、船もホテルも、そこに往来する人々も、歴史の波に洗われつづけていることは否定できない。

(日本女子大学教授)





国際的視野に立っての英語とその教育

福田 勝

英語は現在英米人だけが使用する言葉ではなく、国際語として世界の人々が使用している。私も世界各地を訪れて見たが、英語を知っていればあまり不便は感じなかった。ところで世界各地で話される英語は無論英米人の話す正確な英語ではなく、それぞれの国の訛りの入った英語である。インドにはインドの英語があり、アフリカ人にはアフリカ人の英語がある。日本人も同じで我々の英語は日本語の訛りがある。そこでこれらの英語はそれぞれ Indian English, African English, Japanese English と呼んでよいであろう。

私がフルブライト研究員としてアメリカで首都ワシントンにいた時宿にアフリカから来た人がいたが、その英語をはじめてきいた時全然わからなかった。しかし、いつも耳にしていると段々わかって来るようになった。ひどいアフリカ訛りではあったが、極めて流暢に話した。勿論時にアクセントが誤まったり、文法も間違っていたが、そんな事は気にせず、どんどん英語を話していたことを思い出す。

考えて見れば、我々にとっては英語は外国語である以上下手なのは当たり前で、これは逆に言えば、一般的に言って英米人が日本語をしゃべる場合に当たるわけである。どんなに我々が英語を勉強しても、アメリカあるいは英国あたりに生まれ育つのでなければ、彼らと同じ英語はしゃべれないことになる。

そう考えれば、我々が英語を話す場合、我々の英語を、下手だから、発音やアクセントが時におかしいからと言って卑下する必要は少しもないでのある。

私はそうした考え方でフルブライト研究員としてアメリカで英語をしゃべって来た。我々フルブライト研究員がホワイット・ハウスに招待された時も、日本人の代表として、当時の大統領ケネディに親しく Japanese English を用いて話した。私が大統領に「どうか日本へ来て下さい」と話したら、大統領が大変喜んで固く私の手を握って、「是非行かせていただきます」と言ってくれた事を

思い出す。もっとも彼は日本を訪れる前に児刃に倒れた事は誰もが知るところである。

大体日本人は、どうも英語を話すことを面倒がる傾向がある。あまりに良心的に、文法や発音の誤りをおそれる傾向があるように思う。文法という点で明治以降随分やかましく、一語もおろそかにせぬ習慣のあったことが、一面はよいことであったが、反面英語の使用を億病にさせた原因かも知れない。あるいは永年の島国根性の閉鎖的考え方、あるいは昔から外国語を使う必要のなかった事が大きな原因であったかも知れぬ。いずれにしても日本人は今でも英語の使用に一般的に言って億病である。

しかし日本も国際的に第一線で活躍して、世界の注目を集めている現在、こうした引込み思案から開放されて、先にのべたアフリカ人のように堂々と、時に発音や文法をあやまつてもどんどん使用したいものである。

最近は英米の学者の中にも英語の国際的立場ということを強く認識して、従来のようにやたらに外国人の英語を非難したり攻撃することをやめて、世界の各国それぞれ固有の英語の存在を認めるようになって来た人もいるようだ。よく知られている Randolph Quirk の *A Grammar of Contemporary English* でも、英語を Native, Second, and foreign language という風に分類して、Native は本来の英語で、英米、アイルランド、カナダ、オーストリアといった所で用いる英語を指し、Second language というのは、インド、パキスタン、ナイジェリアといった国で、official, social, commercial or educational activities に用いる英語を指すわけで、英米で用いる本来の英語とは異なったその国特有の英語を指すわけである。英語を母国語としない国で、これを読書、放送、新聞等を通じて、よんだりきいたりする時に用いる場合は、その英語を foreign language と取り扱うのである。日本やフランス、イタリー、ドイツ等にとって英語はこれに当たる。Peter Strevens という人が、1977年1月 Oxford で開かれた International Association

for Teaching English as a Foreign Language の会議場で発表した論文 “English as an International Language: When is a Local Form of English a Suitable Target for ELT Purposes?” では次の如く述べている。

…the native speaker of English must accept that English is no longer his possession alone, it belongs to the world, and new forms of English born of new countries with new communicative needs, should be accepted into the marvellously flexible and adaptable galaxy of “Englishes” which constitute the English language.

ここで大変興味あるのは English の複数形 Englishes で、今迄こんな語は現われたことはないであろう。各国さまざまな英語ということになる。なかなか面白い考え方である。

これらは英語に対する英米の学者の最近の考え方であるが、このほかにも似た考えを示す学者もあり、従来のように厳密な形での英語と観念は薄れ、国々の言語に応じた英語、もっと融通の利く英語になりつつある訳である。しかしだからと言って、英米の本来の英語からやたらに離れた英語を使用してもよいということにはならないので、出来たら英米人の使う正確な英語を用いるのにこしたことはないのである。したがって教える側でも、やたらに文法だ発音だ言わないので、むしろ drill の中で数を重ねて自然に矯正する方が、英語の授業を楽しくする一つの方法と思われる。

英語を楽しく自分のものとする方法の一つに、時に日本語の表現もうまく取り入れることであると思う。いや英米人でも常に何か新しいきのきいた表現を考えているので、私がよんだ Iris Murdoch の *A Word Child* (Panther Book) という小説の中で、Outside it was raining a small cold rain. という表現があり、この rain を用いた再帰構文は今迄見たことがない。これを利用すれば It is snowing a heavy snow. も可となる。

もっと極端な例をあげると、Allan R. Bosworth* の書いた *The Lovely World of Richi-san* という小説があり、その中でやたらに日本語および日本語なまりの英語が使われている。一例をあげて見ると次のようなのがある。

“I will telling you veree strangee story—tu·rue story.” といったたぐいの英語を用いており、この本の中で「赤穂四十七士」のことが書いてあるが、吉良の屋敷に討入った時の模様が次の通り書いてある。

The rest of the palace guard joined the fight, which spilled over into the inner courtyard, but

they were no match for the inspired wave men.

ここで大変私が面喰ったのは wave men ではじめは何のことかわからなかった。「浪の人」は何んだろうかと考えているうちに「浪人」のことだとわかった。もとも前の方には ronin と書いているところもある。こうした極端な日本語の使用もこの本の中でもよく利用されており、この本が best-seller の一つとなったと言うから驚くの外はない。

このように英文自体がしっかりしていれば、こうした日本語の使用もかえって興味をそえることになる。

こうしたことを考える時我々はもっと大胆に思い切って英語を自分のものとして用いたいもので、そういう立場から英語教育を考える時、従来のようにはれ物にでもさわるような立場をすべて、もっと気楽に楽しく英語に接したいものである。そして従来のように先方のものばかり和訳して、得意になるだけでなく、日本の持つ古い伝統の上に立つ文化内容を英米人の筆だけに頼らず、我我日本人がどんどん英語を用いて発表をすることが、今後の英語教育において考慮すべき点ではないであろうか。

すなわち、今後は英語を通じて日本文化の紹介またはその関係の文献の英訳という方面にもっと力を入れて、英語教育を行うべきことと思う。英語教育の上からは、Recognition と共に Production を行うことである。

わが国大学の英文科はあまりにも英米文学研究の真似をして、いろいろ作家の精細な理論的研究をしているが、その研究がどれだけ独自のものであり独創的なものであろうか。

英国の作家 John Wain が *Professing Poetry* という本を書いているが、その中でアメリカの大学の英文学部での教授の講義があまりに理論追求に走りすぎて、文学としての本質、作品の真の意味鑑賞が失われて失望の末大学を去って行くと書いているが、文学というものは本来理論ではない。鋭敏な感覚が陶冶された文学觀と相まって、みごとな花を咲かせるものである以上、それを鑑賞する側にあっても同じものが要求される。あまりにも知的な、味もそっけもない理論は文学を殺すおそれがあるよう思う。さすがにアメリカのすぐれた詩人 Theodore Roethke はそれが可能で多くの学生の人気を得たと言う。しかし彼はもうこの世の人でない。そうした意味からは、日本の英文学科などもっと本質に帰って、地道に文学を味わう立場をとるべきではなかろうか。そして真に文章の面白味を知り、それを發展させて自らも立派な英文が書けるような指導を教師の側はなすべきではなかろうか。英文を書いてみると名文の優れた所以がわ

* 陸軍将校として終戦当時日本にいた人のようである。

かるからだ。よい英文を書くためには、名著名作を片端しからよむことが必要になると思う。その読書指導が大切ではなかろうか。英文を書くという立場からは、日本文学の翻訳も卒業論文に入るべきである。

とに角事情のちがう日本でアメリカや英国の文学部の真似をしても、鶴のまねする鳥である。日本人には日本人の歩む道がある筈と思う。ところで人にこういうことをすすめておいてお前はどうかと言うことになるので、私もその努力を私なりにやっていることを御披露して、この文を終ることにする。

私は日本文学（小説・劇・詩など）の英訳ということを昔からやってきているが、幸その中で、鷗外の『山椒太夫』『高瀬舟』、独歩『春の鳥』を訳して北星堂から *Sanshō-Dayū and Other Stories* として発表したが、これがアメリカの Minnesota University で教科書として使用されている。さらにこの中の『春の鳥』は、Stanford University の雑誌 *Pacific Spectator* の East Asia Literature の翻訳懸賞に応じて当選している。さらに英詩も創作しているが、これも英米のアンソロジーにも3度のっており、海外のいろいろな雑誌にものせている。最近 James Kirkup さんと共に共訳した川端康成の『掌の小説』からの2篇が Pan Book に入ることとなった。その他次々と発表されるはずである。又最近インドの OCARIN という詩誌の Guest Editor として、主として拙訳の日本近代詩を紹介した。

こうして英訳を英米人ばかりにまかせないでやることも、英文学科の教授や卒業生のする仕事の一つではなかろうか。むろんそれは多くの年月が必要であろうが、ついでに最近英國の雑誌 ORBIS にのった英詩を一、二掲げてこの文を終る。なお最近英國の詩人 Dr. Bella

(p. 35 よりつづく)

社会人の使う言葉とされていて、土地の人々はブリッヂスと言っていた。) サリー郡の個人名や家族名が他の資料から確証されているという事実が、民俗学の記録としてのタリアフェロの話の価値にずっと権威を与えていく。

T. B. Thorpe による『アーカンサスの大熊 (The Bear of Arkansas)』は、スピリット誌に出た南西部ユーモアの古典的なものだが、それは、くり返し語られた獣師話の外容を提供しているのみならず、奥地での口承民話が創作へ及ぼした強い影響をも明白にしている。その場面はミシシッピー河上の汽船であり、主人公は、アーカンサスの多弁な山間人で、その長話は、ジム・トゲットと

Cameron から、次の内容の手紙をいただいた。その中に次の言葉がある。“No doubt you will be surprised to hear from me, a long admirer of your philosophical musings on the printed page Your poems are so full of wisdom and perception that I feel we are sort of soul-mates.” これは予想以上の光栄である。

LANGUAGES

So many years
I have spent,
Swinging between
Two languages:
Japanese and English,
English and Japanese.

Now another language
Has come to add
To the number.
When I am enjoying
My isolation,
It comes and whispers
To me something
Of the other world.

MOTHS

Moths have spoilt
One of my books,
My favourite English book.

They may have enjoyed it
Much better than I,
A decrepit teacher of the language.

(京都外国语大学教授)

いう獣師によって、口を空けて聞き惚れている船上の聴衆に語られる。ジムは、はじめに、アーカンサスの豊饒な土地柄を披露する法螺話からはじめ、徐々に聴衆を、創造の熊の叙事詩的狩猟へと導いて行く。そのマンモスのような巨大な熊へのジム・トゲットの追跡は、例え、セント・ジョージと竜との闘い、ペアウォルフとグレンデルとのつかみあいや、エハブのモービーディックへの追跡といったような超自然的な調子を帶び、それがまたこの僻地での獵を、夜のすさまじい怪物と、人間との闘いの象徴の世界にまで引き上げている。

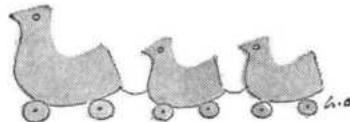
(関西外国语大学教授)

*

*

*

情報サービスとしての評価のあり方



松川 禮子

1. 評価の意味

評価についての関心はすこぶる高い。研究授業の後の反省会で、また学会で英語指導上の工夫が発表された後など、必ず「では、評価はどのようにされているのですか」といった質問が出る。答える方も評価に特別の工夫がないと、「重要だとは思いますが、今後の課題です」などと言う。これほどに評価が大切だということは認識されているらしい。しかしその割には、評価とは何かという基本的な前提は明確にされていない。本稿では、その辺から考えてみよう。

Webster's New World Dictionary で evaluate という項をひくと、① to find the value or amount of ② to judge or determine the worth or quality of と出ている。この定義からしても、評価は決して教育に特有のものではない。小は1本の大根から、大は家まで、買物をする時、また他人を見る時、誰でも評価行為をしている。評価の本質は意志決定のための価値判断にある。

ところで教育評価を歴史的にみると、口頭試問から、paper and pencil test、いわゆる客観テスト、標準テストと、試験だとかテストという測定手段ばかりが並らぶ。評価が測定論的な見方から脱皮するきっかけとなったのは、1930年代にアメリカの進歩主義教育運動の中で行なわれた「八年研究 (the Eight-Year-Study)」において、タイラー (R. Tyler) が示した評価の新しいアプローチである。タイラーは、「評価は、その教育プログラムの目標がどの程度達成されたかを決定するプロセスである」と定義した。測定 (measurement) が static であるのに対し、評価は dynamic であるとの見方がここに現われた。

その後も教育評価の研究はアメリカを中心に行なわれ、多くの理論的・実際的成果をあげた。ERIC/TM Report #65 : The Practice of Evaluation (1977¹⁾) は新しい教育評価を概観できる便利なリポートであるが、その中に次のような教育評価の定義が紹介されている。

"the process of obtaining and providing information for decision makers" (p. 8)

評価とはテストを行なうことだという考え方と比べると、いかにも一般的で広い定義であるが、評価の概念を打ち破り、基本的なところから考え直すには有用だと思い最初に引用しておく。

この定義は decision-oriented (決定志向的) とされているものであるが、どんな decision か、また decision maker は誰なのかを考えしていくと、「何のための評価か」という問題を整理することができる。教育行政官が教育課程編成の資料を得るために評価、カリキュラム開発者のための評価、校長が学校管理運営に使うための評価、教師が学習指導の資料を得るために評価、親が学校選択の資料とするための評価、入試選抜のための評価、英検など資格認定のための評価、生徒が学習していく上でのフィードバックとしての評価など、多様である。評価のあり方や方法を考えていくためには、先ず評価の目的が何なのか、限定する必要がある。ここでは我々にとって当面の課題である教師の学習指導の資料としての評価と、生徒へのフィードバックとしての評価の2つにしぼって論じていきたい。

この2つのケースでは、評価活動の最終的な目標は、教授・学習活動を進歩させるという点にある。この前提を抜きにして評価のみが一人歩きするようなことがあってはならない。

TOEFL や最近では TOEIC の作成・実施機関として、また「セサミ・ストリート」の評価プロジェクトでも有名な ETS (Educational Testing Service) は、大規模な教育測定評価研究機関であるが、サービスという名称は、まことに象徴的に思われる。評価は決して、「評価する側」が権威的に「される側」に押しつけるものであってはならない。評価は教授・学習を進歩させるための

1) ERIC は Educational Resources Information Center の略。ERIC Clearinghouse on Tests, Measurement, and Evaluation, at ETS, Princeton, NJ 08541.

サービスと考えるべきであろう。先に引用した定義を「教師がよりよい学習指導を行ない、生徒がよりよく学習できるように、必要な情報を収集し利用すること」と言いかえよう。

2. 評価の現実から

上のような観点から現実の評価を点検してみると、いろいろ問題のあることが分かる。

第一に、未だに評価はテストによる生徒の相対的位置付けだという点が挙げられる。順位であれ、5段階評価であれ、相対評価では「できる子」がいれば必然的に「できない子」がいることになる。評価はそういうレッテルとしての自他のイメージをつくり上げ強化する機能を果たす。このような評価を繰り返していると、教師にとって「できない子」の存在はあたりまえとなり、評価が指導の反省材料を与えてくれることにはならないのである。生徒にとっても、教室で既に「できる子」であったり、「できない子」であったりするのに、改めて“5”とか“1”とかの評定を見ても何ら情報を得ることにはならない。優越感と劣等感が刺激されるだけのことで、適切な情報サービスとしての評価機能は全然果たしていないのである。

また、50点とか80点というテストの総点を情報として提示することにも、大いに疑問がある。測定とはそもそも一つのものさしの上に位置付けることであるのだが、英語のテストで例えば1問3点というのに、ものさしの目盛りとしての根拠があるわけではない。50点と60点の差10点と、80点と90点の差の10点が同量の英語の学力を意味している訳でもない。また同じデータが、どういうものさしで見るかによって違ってくる。例えば hearing 問題20問、英文和訳5問から成るテストを考えてみよう。A子は hearing が得意で20問全部正解したが和訳は1問しかできなかった。B男は hearing は8問しかできなかつたが、和訳は得意で5問とも正解した。こういう元のデータが配点によって下の表のように違った点数となる。

配点		h 和 4	h 和 3	h 和 2
A子	84点	68	52	
B男	52点	64	76	

h : hearing
和 : 英文和訳

この例は極端で、またものさしを配点の問題としてのみ扱っているため、単純化しそぎているようにみえるかもしれないが、ことほどさように、テストの点数は恣意的なものなのである。教師にとってみれば、どの問題ができるどの問題ができないという加工前の元のデータの

方がはるかに有益である。生徒にとっても点数の上がり下がりに一喜一憂させられるばかりで、決して学習状態の正確なフィードバックにはなっていないのである。一つのテスト結果は多様な見方のうちの一例を示しているにすぎない。生徒は個性的な存在である。しかしにテストは結局一次元のものさしである。教師はそれぞれの子供に合った多様な評価の軸をもつ必要がある。

全員が一つのものさしで測られることの問題点を更に助長しているのは、評価は平等にかつ客観的に行なうべしという常識である。確かに評価結果が社会的に通用するものである以上、客観的であろうと志向することは必要である。しかし、評価の平等・客観化は、教授・学習活動を進歩させるという前提があって初めて意味をもつ。あまりにも選抜のための評価の考え方が常識としてまかり通っていないだろうか。例えば、クラス全員を同じ課題で評価しなければならないということは疑う余地がないだろうか。一人一人の生徒の学力を適格につかむためには、生徒により、違った評価課題が必要なこともあるはずである。一人一人の能力をのばすという視点からは、全員一律式のテストの形式があらゆる場合に有効だとは考えられない。

3. 新しい評価の考え方

このような問題点を克服するために、最近新しい評価理論が考えられ、また実践に移されてきている。以下では、到達度評価、形成的評価、授業過程の評価の順に、新しい評価の考え方を概観する。

(1) 到達度評価

前項でも述べたように相対評価は、基準となる被験者集団の得点分布の中で、個人の成績を位置付ける集団準拠測定 (norm referenced measurement) の考えに基づいている。これによれば他の人と比べてどの位の位置にいるかは分かるが、具体的にどういう課題ができるかとか、何がどのくらい進歩したかという情報は落ちてしまう。そこで他の人とは関係なく特定の課題ができるかできないかを判断する絶対評価という概念が、相対評価に対して、対立的に用いられてきた。

最近これを更に一步進めて課題をやさしいものから難しいものへと系列化し到達目標として位置付ける到達度評価（または目標準拠評価：criterion referenced evaluation）という考え方がでてきている。これによって特定の課題ができるできないのみならず、一定の学習系列の上で、どこまでができていて、どこからができないかが明らかになる。また到達目標と現在の学力とのへだたりが具体的に示されるので、学習と指導のための方略が

たてやすいという利点がある。

ただし到達度評価には2つの必要条件がある。一つは最終目標や途中の諸目標が、操作的・行動的に表現され、「～することができる」という課題になるということ。もう一つは、ある課題ができるためには前提として何が必要かという学習の系列あるいは筋道が分かっていることが必要である。

ところが英語科では、最終目標は分かっていても必ずしも途中の目標が構造化され、行動目標でよく示されているとは言えない。例えば単語4,000語について読んだり、書いたり、意味をとったりすることができるという到達目標をたてた場合、その4,000語を難易度や必要度など一定の基準で何段階かに分けることが必要になってくる。また「読むこと」の領域では、「英字新聞をほとんど辞書をひかずに読むことができる」という目標をたてたとして課題分析をしてそこに至るプロセスでどのような行動目標が用意できているであろうか。

このように考えていくと、到達度評価の考え方方が、プログラム学習などから発生していることからも分かるように、決して評価だけの問題ではなく、教授・学習の方法と密接な関係があることがわかつてくる。学習目標、内容、教材が充分システム化され、ていねいに準備されていれば、教師も生徒も有効な情報を到達度評価から得ることができるであろう。

(2) 形成的評価

形成的評価 (formative evaluation) ということばも最近よく耳にするようになってきた。元々はスクリバン (M. Scriven) がカリキュラム評価を、総括的評価 (summative evaluation) と形成的評価の2つに類別したのが始まりである。総括的評価は、カリキュラム開発が完了した時点で、そのカリキュラムを採用するか否か決定するために、成果を判定するものである。一方形成的評価は、カリキュラム開発の途中で、うまくいっているかどうか、改善すべき点があるかをモニターする働きをもつ。総括的評価を行なうのは、一応カリキュラム開発者とは別の外部の人であるのが普通なのに対し、形成的評価はカリキュラム開発にたずさわる者の仕事という違いもある。

しかし最近用いられている形成的評価という用語は、これとは違ってブルーム (B. S. Bloom) が学習指導の文脈で使い出した意味のものである。ブルームの用法では、総括的評価はひとまとめの学習が完了したところで、つまり単元、学期、学年の終りなどに総合的に行なわれる評価である。形成的評価は、学習活動をうまく進めていくためにその進行中にたびたび行なわれ、軌道修正す

るための評価である。ブルームは更に学習活動が始まる前に行なう診断的評価 (diagnostic evaluation) を加え、これら評価活動によって、生徒全員が習得目標に到達するという完全習得学習を目指している。

到達度評価の項で述べたように、学習目標が明確に定義され、学習の筋道が階層構造として明示された上で、更に各水準に対応した課題から形成的テストが作成される。このテストの実施によって、各生徒につき達成された目標と、更に学習を続けるべき点が明らかにされる。下位課題を積み重ねて上位課題へ進むという学習方式を評価が強化するのである。この意味では形成的評価は、到達度評価の具体化と言えよう。ただ学習の筋道については、生徒が皆同じ系列で学習するとは限らないので、教科の構造だけから決めることなくプランチングや個別化など個人差の配慮も当然必要である。

(3) 教授過程の評価

上の2つの評価もそうだが、日本ではまだ「評価される」のは学習者だという考えが一般的である。形成的評価の元々の意味であるカリキュラム評価としての評価の側面は忘れられがちである。本当に教えているかという反省、accountability という発想は欠けている。藤掛庄市氏は『変革の英語教育'80s』の中で accountability に「投資にみあう責任」という訳語を当てて、評価されるべきは教える側ではないかと論じている。更に氏はカリキュラム開発の中で評価を、「結果の評価」と「過程の評価」に大別し、従来でき栄えを問う結果の評価ばかりが問題にされ、目標設定、学習内容決定、教材・教授技術・メディアの選択などについて反省を加える過程の評価の面がなされてこなかったと指摘している。

学校のもつべき評価機能は能力検定ではないのであるから、評価されるのは生徒ばかりでなく、教える側の教授過程が当然評価の対象となるべきである。しかし、それが単に反省として場あたり的に行なわれるのに留っていてはならない。教授過程の評価で何を見るべきなのか、観点とその方法論が研究される必要がある。

accountability を問題にする時の、一つのポイントは一定のインプットに対して、いかにアウトプットを大きくするかという視点である。教師がモデルとして文をすべて与えてしまって、生徒はそれをリピートしたり、暗記したりするタイプの授業は、インプット過多である。インプットとしては言語材料のみならず時間も考えられる。

第2は与えられた条件における、システム構成要素のシーケンスや数の最適化である。新出単語を教える時のピクチャーカードの提示順序や提示枚数などについて、

仮説をもってのぞむような態度も重要である。

4. 新しい評価の方法

本稿では評価を情報サービスとしてとらえてきたので、最後に評価の方法をデータ収集、処理、管理、提示サービスの順に述べよう。

(1) データ収集

評価におけるデータ収集の方法には、テスト、観察法、質問紙等による実態調査法などがあるが、ここではテストについて触れるに留める。教室で行なうテスト項目を考える際重要なことは、生徒はテストの内容や形式に合わせて勉強するので、テストで行なわせる活動は学習上望ましい性質のものであるべきだということである。例えば発音については筆記テストより音声テストすること、英文を読むのに後戻りしながら読まないようにさせることができることが望ましいなら、読解テストの項目を作成する際、そうできないように物理的、又は時間的制限をつけることが可能である。テストを受けることそのものが一種の学習であるようにしたい。

更にテストそのものが自己目的化することを防ぐために、テストか学習かわからなくする埋め込みテストを考えることも必要である。学習プリントという形式で行なうのもよい。

(2) データ処理

データの種類を考えてみると、テストの総点は比例尺度でないのはもちろん、間隔尺度であるとも言えない面があり、あまり有効でない。むしろいくつできたくらいの情報の方が適当である。他には、正答か誤答か、できたかできないか、書けたか書けないかというような1/0データがある。また英作文の評点1から5とか、誤答のタイプAからEのように順序尺度ないし名義尺度的な、カテゴリカル・データがある。

このようなデータの性質からは、従来の平均点とか標準偏差などを求めるタイプの統計処理は適さない。基本的処理として正答率、二重クロス、マルチクロス、カテゴリ分布、エントロピーなど有効である。更にこれをグラフに加工したり、時間系列の上で、学習のび率、変化率を求めて、分析する。

(3) データの管理

到達度評価や形成的評価を効果的に行なっていくためには、学習目標に対応したテスト（または調査）項目を準備しておくアイテムプール（またはアイテムライブラリ）が必要になる。アイテムプールには、テスト問題を一項目毎に、目標、形式、提示メディア、対象学年などをコード化してつけ、問題全文や正答、評価基準、過去

のデータなどを記さいしてファイルしておき、必要に応じて検索する。教師が個人的にプールしたり、グループ毎に共有財産とすることができます。また生徒の個人別の学習歴を記録・保存しておくファイルも必要である。これには学習目標、学習内容別に学習状態を入力しておく。やり方としては一般的のカードやファイル用文房具、パンチカードなどを使えば十分であるが、パソコン・コンピュータ²⁾を使う時代も案外早く来るのではないかと思われる。

(4) 提示サービス

最後に、評価結果をどう提示したらよいかという問題に触れておこう。結果情報については、答案など速やかに返すべしというのが常識とされてきた。しかし、採点されて答案を返されることによって得る情報は「良い点」・「わるい点」であり、情動的なレベルで受けとられることが多い。具体的にどこが悪いか、どうすればよいかの情報を与えてくれる診断票や処方せんが必要である。筆者はピッツバーグ大学学習研究開発センターを見学した時、TVディスプレイ上に個人別に、次にやる課題が提示されるのをみて感心したが、マイコンの低廉化と普及によって、日本でも教室で生徒が各自マイコンによる診断と処方の提示を見るような時代がすぐそこまで来ているように思われる。

以上、これから英語学習評価のあり方を一種の情報サービスとして概説してきたが、結局は評価の変革も、英語教育全体の変革を必要とすると思われるるのである。

（岐阜大学助教授）

〈参考書目〉

- 1) 東 洋『子どもの能力と教育評価』東大出版会、1979.
 - 2) 教育学講座5『教授・学習・評価』学研、1979.
 - 3) 藤掛庄市『変革の英語教育'80s』学文社、1980.
 - 4) 『新・教育の事典』学研、1979.
 - 5) 松川禮子・後藤忠彦『英語学習の評価法』学習システム研究会、CRDC岐阜大学、1978.
- 2) 岐阜大学教育学部英語教育研究室の1978年度卒業研究の中で、マイコンによる英語実験クラスの評価情報の提示が行なわれた。



ランゲージ・ラボラトリー教育

改革案—教材作成と評価をめぐって



河野 守夫

Language laboratoryによる外国語教育は中学・高校・大学のそれぞれのレベルで、その直面している問題点が多少異なるが、ここでは掲載誌の性質上、中学・高校の現状について述べることにする。

I 曲り角の LL 教育

Language laboratory教育の歴史を振り返ってみると、いくつかの消長が目につく。The Ohio State University の R. H. Waltz が外国語教育のための画期的な電気工学設備を考案し、これに初めて language laboratory と名づけたのが1920年代の中頃で、LL¹⁾は黎明期を迎える。しかし、やがて language laboratory という名は、その設備とともに忘れられて、再びこの言葉が人の口にのぼるまでに約20年の潜伏期が必要であった。当時は訳読法の最盛期で、世間は音声言語の反復練習用のこの器械の必要性を認めなかったからであった。やがて、第2次世界大戦の前後から、構造言語学と行動主義心理学に基づく Audio-Lingual Approach が喧伝されるようになると、LL は水を得た魚のように成長する。わが国でも1950~60年代にかけて LL は、C. C. Fries などのオーラル・アプローチとともに、世間の脚光をあび質量ともに急速に進歩した。しかし、変形生成文法に基づく言語観が機械的の反復練習の欠点を指摘し、認知的な教授法が条件反射的教授法にとって代わって尊重されるようになると LL 熟はまた下火となる。言語学界の関心が、生成文法から語用論やテキスト文法に移りつつある今日もその事情はあまり変わらない。例えば、最近アメリカで注目されている The Silent Way, Community Language Learning, Total Physical Response Approach などの教授法は概して anti-laboratory 的色彩が強い²⁾。

1) LL という表現は和製英語の一種で、外国の文献では通例 lang. lab. とか lab. という。

2) ただ H. Winitz の OHR Method は LL に十分活用できる。

現在 LL が直面している問題は、このような言語教育観の変化ばかりではない。次のような現実がある。

1) 教材がない。LL がわが国に紹介されて約30年が経過し、その間いろいろな市販用教材が作られた。しかし、従来の授業に比べて個別学習の傾向が強い LL 授業では、他人の作った教材が自分の学級にそのままぴたつと合うとは限らない。また、たとえ合ったとしても、中学・高校の現場では教科書をこなすことで精一杯で、教科書と無関係な音声教材を使う余裕などないのが現状である。そこで、音声教材を検定教科書に基づいて自作し、普通教室授業と LL 授業が互いに助けあって相乗的效果がでるようにしようということになる。これは正論である。しかし、何故だか検定教科書は2, 3年に1度改編されるので、たとえ苦心して教材を作っても、もとになる教科書が改編されると古くなった音声教材は期待どおりの働きをしなくなってしまう。こんなわけで、現場が満足のいくような教材はいつまでたってもできないことになる。

2) 教材作成は容易でない。そこで、教科書が變るたびに音声教材を作り変えて行こうということになる。ところが、音声教材の作成や改編には一種の高等技術とかなりの英作文力が必要で、誰にでも簡単にできるというしろものではない。さらに、教材台本ができ上ってからも、録音し、テープを編集するなどの仕事量が馬鹿にならない。あれやこれやで、ただでさえ忙しい現場の先生は尻込みすることになる。

3) 授業の進歩がにぶる。標準週3時間という英語のカリキュラムの中で、1時間を LL の授業にあててしまうと、実質的な英語の授業は残りの2時間でせねばならないので進度が非常ににぶる。この苦情には、LL は器械を用いて半自動的に行う授業だから教室授業での導入のあとでの復習段階で行うべきもので、授業の推進者(promotor)としての役割りは果たせないという考えが前提にある。

4) LLでは多様な授業展開が難しい。 最近の心理言語学研究の発展は著しく、オーラル・アプローチが唯一絶対の教授法とは言えなくなってきた。1時間の授業のうち、ある場合には motor approach 的な手法(英語とともに生徒の体を動かさせて学習させる教授法)を、あるときにはグループ学習の手法をとり入れたいなどというとき、座席が固定し、時にはブースまである LL はむしろ邪魔になる。LL では画一的な授業しかできないというのである。

5) 入学試験の準備に LL は役に立たない。

以上の否定的な意見の中には、日本の教育界の矛盾がそのまま吹き出ているようなものがあり、その解決には教育制度の根本的改革や教師一人一人の価値観の変更が必要で、1編の論文で処理しきれない問題がある。例えば、「教科書以外の教材を使う余裕などない」(1)の意見)と言しながら、多くの学校で受験問題集は使っているし、「忙しくて音声教材など作るひまがない」という教師が(2)の意見), 家庭教師や塾のアルバイトには精を出すというケースがある。また 1) で述べた教科書をしばしば改編する問題には教育行政の洗い直しが必要だし、5) の入試の問題は、その文法・訳読問題偏重の出題傾向が多くの人から指摘されながら、今だに改善されないのでみてもわかるように根深い問題を含んでいる³⁾。

しかし、LL は果たして英語教育に必要な教具か、もしそうなら、どんな使い方が中学・高校の現状に最適かという問題は、このような問題とは別に、真剣に考えねばならないことだろう。

II 心理言語学研究の示唆するもの

まず、言語学習に音声が基本的な役割を果たすという考え方を支持する学説は多いのに、これを否定する実証例はほとんどないという事実から、何らかの音声ドリルを基礎にして英語教育を進めねばならないということに異論のある人はまずなかろう。LL に一種の本能的な嫌悪感をいだき、「LL 学習を含めて Audio-Lingual Method が、大変効果がある」という実験データーや理論が非常に

3) 一般に学会で研究発表をして何らかの意見を主張するには、その主張を支持するデーターの提示が必要である。この考え方でいけば、現在のような文法・訳読式学習が本稿で述べるような教授法より入試対策として効果があるという報告はどこにもないのである。アメリカのハイスクールを卒業して、入試準備を全くしないで筆者の勤務校を受験する学生がかなりいるが、彼らの英語の入試の成績がつねに優秀であるという現実から考えて、現在の高等学校での学習法が入試準備としても最良のものかときどき疑わしくなる。

少ないので、どうしてこんなに全世界に受け入れられるのか不思議である」と言う心理言語学者の W. Lambert さえも、音声言語に生徒を侵らせる教育をする必要性を説いている (Lambert 1970)。では音声英語をどのようにして, listening と speaking のどちらに重点を置いて教えるべきなのだろうか。これについては両者を分離して教えた方がよいとする実験結果がかなり多く、その際 listening を先に、speaking をあとで教え、前者に重点を置くべきだという (Asher *et al.* 1974, Postovsky 1974, Winitz & Reeds 1975, Gary 1975, Nord 1976)。特に調音はあまりやかましく教える必要はない。なぜなら、かなりなりのある發音でも、実際問題として、英米人にもよく通用するし (Crystal & Davy 1975), listening からの転移もかなり期待できる (Asher 1976)。Speaking で大切なのは、英米人のようにきれいな發音で流暢に話せる人材を養成することではなくて、少々の發音や文法上の誤りがあっても、自分の思想を堂々と主張できる態度とマナーを心得えた人物をつくることである。従って LSI はさしあたり listening の演練に用いるべきだということになる。

ところで、listening とは、英語の音声特徴を条件反応学的に獲得することではなくて、音声入力情報を積極的に分析したり総合したりする能動的な作業なのである。Atkinson-Shiffrin のモデルに従えば、音声入力は極く短い間、模倣的 (echoic) に感覚貯蔵庫 (sensory storage) に格納され、これが、すでに長期記憶 (long term memory) として大脳に貯蔵されている文法・語の規則や (言語外の) 過去の諸経験に照らして総合的に分析されて、そのうち整理のついた情報だけが新たな知識として長期記憶に追加され、整理のつかないものは短期記憶としてやがて忘れ去られるということになる。この際、音声入力に付随した言語外情報も、総合や分析の対象となるということは (河野, 1977), Summerfield の次の実験によっても明らかである。すなわち、音声と同時に話者の顔や唇のビデオを見せて音声情報の理解度を測定すると、100点満点で、音声のみの場合23点、音声+顔65点、音声+唇54点であった。

ところで、聴解に影響を及ぼす言語内情報のうち一番大きな役割を果たすのは、個々の音の聞きとりでもなく、morphology や syntax 等の文法情報でもなくプロソディーである。このプロソディーの予想外の働きについて、例えば Darwin (1975) は、被験者の両耳にヘッドホンを用いて異なる英文を流し、その一方だけを書きとるように命じると、被験者はその課題を容易にこなすが、ある時点ではプロソディーの型をとりえると、構文や意

味情報はそのままで、被験者の注意の方向は変ると報告している。さて、プロソディーはリズム・発話速度・強さ・ピッチなどの総合現象だが、この中で特に大切なのはリズムである。Haggins (1979) は、基本的に等時的なリズムは発話の明瞭度を高めるが、リズム性が失われると、分節音素がすべて識別できても、全体としての発話の明瞭度は損われ、この2つの明瞭度間には統計的に有意差があったと報告している。Lehiste (1973) は listening unit の形成にリズムが重要な役割りを果たしているという。河野 (1980) は、日本の中学・高校生を被験者にした実験で、リズム単位 (tone unit) 毎にポーズをおくと聴解度はかなり伸びるが、発話の区切り方が tone unit より大きくても、小さくても聴解度が落ちることを実証した。その際、注目すべきは、tone unit を2つ以上包括した大きな区切り方の方が（リズム性は失われていない）、1つの tone unit を細分した区切り方（リズム性は失われる）より成績がよいことである。Studdert-Kennedy (1979) と Allen (1979) は、リズム性を指向するのは人のすべての筋神経運動 (motor action) に伴う生得的な傾向だと言う。一般に、幼児の言語獲得や失語症患者の症例観察で歩行などの体の動きと言語運用能力とはかなりの相関があることが認められており、ここに前述の Motor Approach を支える脳神経生理学的根拠がある（この教授法の学習効果については Kohno (1975) 参照）。さて、この人間のリズム感はイントネーションの構造によって左右され、抑揚は意味を示唆する重要な手がかりとなる (Donovan & Darwin 1979)。Crystal (1973) は幼児の言語獲得の過程を観察した結果、抑揚はことばの生成の vehicle になっていると言う。

III 具体的な解決策

以上から、minimum pair drill や文型教材を新たに作らなくても、意的的にまとまりのある story (例えば教科書付属のテープ) を開かせ、その内容について cognitive な課題か、動作 (motor action) を feedback の手段として課すことができればかなりよい教材が得られるということがわかる。

例えば、cognitive な課題の与え方については、次のような方法が考えられる。すなわち、音声教材のうち問題となる箇所に信号音を入れ、そこでテープを止めさせ、その箇所（やそこまでの箇所）についての質問をあらかじめ用意したプリントで答えさせるのである（例：今聞いた He left his work. という文の意味は a) He wrote about, b) He's remembered for, c) He signed.

のうちどれか）。要するに written test で「下線部について質問に答える」というのがよくあるが、これを音声教材で行うわけであって、質問の内容は、意味、文法、語い、内容の要約、書き換えなど何でもとりあげることができる。また、cloze テスト方式をとりれて、例えば 5 語毎に 1 語というように一定の間隔で単語を空白にし、音声を聞きながらその空白をうめさせる方法もある（ゲシュタルト心理学の応用）。

動作を併用する方法も同様に story や会話を聞かせて次のような工夫をすればよい。a) その内容を絵や図に表わさせる、b) あらかじめ用意した数コマの絵を、物語の筋の順に従って並べかえさせる、c) ぬり絵 (There is a wagon in front of the tree. Paint the wagon.)、d) 切り絵 (Draw a train, an airplane and a car. Take the scissors. Cut out the airplane. e) 動作一般 (例えば真すぐに伸ばした手と肘をまげた手で時計の長針と短針を示すことにして、It's three o'clock. It's half past nine now. などという英語に合わせて座席にすわったまま動作をさせる)、f) 音楽 (例えば「結んで開いて」のメロディを「Close your hands and open your hands...」と英語で与え、これに合わせて動作をさせる⁴⁾。g) ゲーム (例えば、前後関係から考えて矛盾した表現が聞こえてきたら stop をかけさせる：Sam was a high school student. He was going to play tennis so he took his ball and bat. (stop.)；その他、英語のなぞなぞなど。) また、伝統的な dictation の手法もかなり効果があると Postovsky (1974) は言う。

このようにして作った教材が生徒の学力に合わないときは、前節のリズムとポーズの関係を利用して教材に難易をつければよい。すなわち、意的的にまとまりのある tone unit 每 (大体句単位毎) に教材をくり返せば、それより大きな単位毎 (例えば文や節単位毎) にくり返えすより、教材の内容はそのままでも、かなり易しくなり、story 全体を単純にくり返えすとともに難しい教材となる。

以上の教材作成法は、一部を除いて教科書付属のテープをほとんどそのままの形で用いることができる上に、かなり効果があるので、第1章の 1) 2) のような苦情は少なくなるだろうと思われる。また、発見学習的に音声教材が利用できるなら、新教材の導入に活用することも可能で、復習段階に使うよりむしろこの方が理屈にあっている。例えば、未知の単語や文型がいくつかあっても、いきなりテープを聞かせて、story の大意をつかませたり、話の筋を絵や紙芝居にまとめさせるなどの方法

4) e) と f) はどちらかと言えば普通授業向き。

が考えられる。また教師の方で要約文を作り、その中の意味的に重要な箇所をわざと空白にしたプリントを生徒に渡して空所を補充させることもよいだろう。そしてこれを reading や writing 中心の普通の授業につないでいけば 3) の悩みはかなり解消するのではないか。

なお、VTR などで映像付きで音声を聞かせるときは、話者の表情や体全体を見せる方が、話の筋を絵で示す従来の方法よりも有効である。Kinesics に関する情報は、個人の癖や文化に個有のものもあるが、本来は音声と同じ脳神経作用の表出であり、Birdwhistel (1970) や Summerfield (1975), Stevens (1972) が示唆するように、両者は情報伝達手段として相補的関係にあることが多い。これに対して、Tom and Ken were talking each other. という文を聞かせて、Tom と Ken が話をしている絵を見せるという手法は確かに生徒の音声理解を容易にするけれど、映像と音声は互いに無関係な source から出た情報であり、この音声を聞くときにこの種の光景を目にするということは実際問題としてほとんどあり得ないのである。

III 将来の問題

1. 設備について

設備は概して簡単な方が実用的である。ブースのある full LL を 1 つ作る費用があるのなら、ブースのない簡易 LL を数多く作る方が、中学・高校の段階では、応用性が高い。

一方、最近は生徒主導型の創造力を高める授業の価値が見直され、グループ学習、問題解決学習などと研究が進んでいる。すでに述べた Audio-Motor Approach にしても、その教授技術は上述のような簡単なものではない。発見学習、洞察学習も大切である。そこで将来の英語教室は、いわゆる LL 的要素と共に、これらの授業形態を随時展開することのできる flexible なものにする必要があろう。そのような教室こそ真の LL であって、LL と言えば生徒席にマイクとヘッドホーンやテープ・レコーダーなどが用意してある設備を指すといふ現在の固定観念は早晚打ち破らねばならないだろう。なお、Green (1972) は Audio-Lingual Methodに基づいた授業なら、テープ・レコーダー 1 台で行っても、立派な LL を使っても、その学習効果に有意差がなかったと報告している。

2. 普通教室授業は英語で行うべきである。

英語で授業を行うことの 1 つの大きな目的は、先に述べたように、誤りを恐れずどんどん自分の考えを発表する active な態度を身につけさせるための動機づけをす

ることである。したがって、まず誤まりに対して寛容な雰囲気作りをしなければならない。先生の発音が少々ましくても、文法的におかしいところがあつても、これは外国人として当然である。英米人さえ spontaneous な発話では文法的誤りをしばしば犯すものである。(正しい英語を聞かせる場としては LL がある。) 生徒の自由な発話についても同様で、誤りの訂正は発話内容の事実関係だけにとどめるべきである。自由に発話する態度が身につければ英語の総合力はかなり向上するものである (Curran, 1972)。

3. LL を自習にも開放すべきである。

Listening の習得には、音声言語をかなりの時間聞くということが大切である (Sorense 1970)。現場では「ゆとりのある教育」の実践上、正規の授業以外に LL を使わないようだが、せめて希望者だけにでもそのような機会を与えるような工夫が必要だろう。

4. LL は研究上貴重な設備である。

言語教育研究は今後実験心理学の手法をとり入れて発展し、listening, speaking, reading, writing の各分野で教授変数の客観化と整理が進み、その要因相互の相関が計量的に測定されて科学化していくことと思われる (1975 年米国視聴覚教育学会調査)。その際、多数の被験者を同一環境で一斉に扱える手頃な設備は LL を置いてまず他にあるまい。例えば第 2 章で述べた諸研究のうちかなりの部分が LL の助けをかりている。

また、聴覚音声学の領域に関する研究や、言語学の分野でも givenness と newness, presupposition, end-focus, information-focus, それに ellipsis や adjunct など、イントネーションが語法に影響を及ぼす分野の研究に LL は重要な働きをする。

一方、learning laboratory, プログラム学習, CAI などいわゆる教育工学研究に志す人々はまず LL による教育の研究から始めるのが最も近道である。なぜなら、LL による教育はこれらの教育の原始的な形態を数多くもっているからである。

本稿で引用したすべての文献をすべて示すのは紙数の関係で無理なので、上述の文献がほぼ万遍なく紹介されている次の文献だけを紹介する。河野守夫編『Listeningについて』『語法研究と英語教育』第 3 号、山口書店、1980。

(神戸市外国語大学教授)

*

*

*



クローズ・テスト

—その特質と採点方法—

伊藤弘子

I. 特徴と名称

クローズ・テストの実験研究を行ってみて感じることは、問題作成とテスト実施が一つの山であることである。まず実例を示して説明しよう。これは日本の大学生のために作ったものである。

There once lived in China an old abbot. On account of his wisdom and virtue his name was known all over the land, and disciples gathered from far and near. If he was neither in the lecture-hall nor at his meditation, he was sure to be found at work in the fields around the temple. He was now nearly eighty.

"At his advanced age," the disciples would (1), "his field labor is hardly justifiable either (2) discipline or as necessity. Besides, his example (3) certainly very disturbing to us when we (4) inclined to take some rest now and (5). Suppose we go to the master and (6) him to cease working in (8) field."

空所と空所の間の単語数を数えるといずれも7語ずつあるから、この問題はある英文の流れの8語目の単語を機械的に抜いてつくられたものであることがわかる。6語目と決めて7語目と決めてもかまわない。これまでの経験では、手掛かりが少なすぎれば無回答が目立ってくるし、多すぎれば必要な数の空所をつくるためには全体の量がふえ、テスト実施のための時間も長くかかる。従って5語おきから9語おき位までがよさそうである。

次は同じ材料ながら、乱数表を用いて空所を決めた例である。乱数表の中で4以下の数字に出会った時は5以上の数字に出会うまで任意に指を進めていった。つまり

空所と空所の間の手がかりとなる単語の数を最小は4と決めたのである。同様に最大を8と決めた。

(前置きの部分は同上)

"At his advanced age," the disciples would (1), "his field labor is hardly (2) either as discipline or (3) necessity. Besides, his example (4) certainly very (5) disturbing to us when we feel inclined to take (6) rest now and then. Suppose (7) go to the master and beg (8) to cease working in (9) field."

これら2つに加え、品詞中心の空所の決め方もありうる。いずれも空所を決める際に出題者の意図を入れないための工夫である。クローズ・テストの大きな特徴の一つは、英文の流れの中に無意図的に空所をつくっていく問題の形式にある。無意図的に問題作成をするということは、それを受験したグループの種々の反応からより多くの情報を得ようとする出題者の姿勢につながるものである。すなわち、さまざまな答えが出そろったのを見れば、空所にもともとあった original word とその同意語、時には反意語まであり、更にその original word の品詞とは別の品詞の単語も見られ、「十人十色」の感を強めるものである。ここから受験者個人の英語という言語の中の強みと弱みの分布がわかるし、もし母国語を異にするグループに実施したものであれば、それらのグループごとの思考のパターンさえもわかるのである。また非常に変化に富む反応であればこそ、採点法も工夫されていく余地が出てくるのである。ところが意図的に空所を作った場合は、その意図に正しく応じているかいないか、正解を書き入れているかいないかという基準になり、情報量は小さくならざるを得ない。

なお問題作成にあたっては、空所なしに読んだ時受験者達にとっては易しすぎるくらいの英文でなければなら

ないし、一つのまとまりのある部分を使用したい。一つのまとまりとして英文の流れが長すぎるような時には、初めか中頃か終りの方で空所なしに与えるのも可能だし、その時原文通りではなくかいつまんで与えるのも可能である。空所が固有名詞や数字にあたるのは避けた方がよいと思われるので、それにあたってしまった時のみ1つ前の単語か1つ後の単語に空所を移したらどうであろうか。日本でもクローズ・テストを高等学校の授業の中で用いたり、大学生に実施したり、英語圏内での生活経験を有する学生とそうでない学生の両方に実施して比較をしたり、次第に关心が持たれ始めているが、問題作成が原因して思わしい結果が得られなかつたという報告もある。考えて見れば、無意図的な空所の決め方であるから、これほど簡単に問題が作られるものも他に無いのに、材料となる英文の流れの難易や空所の決め方がクローズ・テストの成否を左右するものであるらしい。これらについては現在未だ解明されていない状態である。但し成否は次に述べる実施の仕方にも左右される。

これまで約1,800名の大学生と高校生（日本、韓国、フランス、英語圏）の協力を得たが、実施の責任者には学生への指示の中で「テスト」という言葉を使わないようにならねている。見慣れぬ形式の問題に加え、テストされているという心理的圧迫は、答えを書くのを拒否させたり出たら目に答えさせたりすることを引き起こすからである。

- ・全体の話のつじつまが合うように、1つの空所に最も適当と思われる単語を1語考えて解答用紙に書きなさい。
- ・1つの空所には正しい答えが1つだけではなく、いくつも可能ですから、自由に考えて解答して下さい。
- ・Isn'tとか You've, I'llなどのように短縮した形も1語とみなします。
- ・どうしてもわからないところは、そのままにして下さい。

これは筆者が国内外の実施責任者に依頼する時の実施の手引きの一部である。研究者の中には、出題の空所全部を無理にも埋めさせようとする指示の仕方をする人もいるが、どの空所が答えられていないかも一つの興味ある情報として受けとめられるのである。先にクローズ・テストの特徴の一つを無意図的に決めた空所にあるとしたが、もう一つの特色は、被験者の一人一人が持てる英語の知識と勘を最大に働かせて「自由に」1語を答えさせることにあると言えよう。

クローズという言葉は *cloze* と綴るが *close* (閉じる) に通じており、ゲシュタルト心理学者 Taylor が心理

学用語の *closure* (閉合) からヒントを得て造った語とされている。大塚九三子氏の研究から名称について引用させていただこう。

人間の精神活動として不完全な形のものでもなじみのあるもの、または連続性のあるものは、それなりに完全な形として知覚される。すなわち、不完全な円が完全な円として閉じられる（閉合される）という傾向があるとするのである。このような活動を Taylor は言語活動の中にも応用しているのであって、それゆえに *closure* に似た *cloze* という名をこの方式につけたという¹⁾。

このようにクローズ・テストの技法は、不完全な情報が全体からの手掛りを得て、補って把握される作用に基づいているものである。もし一つの慣用的な英語の文句に空所があたれば、英語を母国語とする人々の反応は自然に同一のものになりがちであろうし、非母国語話者グループからも余り多くの種類の反応は出ず、圧倒的に一つの単語に反応は集中するかもしれない。しかしながら、必ずしも慣用的でない個所に空所があたれば、思い思いの発想にまかせ沢山の反応が出てくることは容易に想像できる。クローズの名称の由来を考える時、クローズ・テストの中に自由を認めていることが一つの特色であることを忘れてはならない。

II. 採 点 法

次にこのように「自由に」考えられて出て来た種々の反応を一体どのように処理したらよいのであろうか。第一に考えられるのは、1つの空所に対して受容できる答えがいくつもあるような採点法であろう。答える側の自由を尊重するならば語学テストに見られる伝統的な Right—Wrong の厳しい基準とは異なった基準を持たなければならないのである。Oller や Pack はこの方法が最も信頼度の高い採点法だと言っている。しかしながら文法及び意味の上から各反応の良否は判断できても、慣用ということになると、非母国語話者の教師にはなかなか判断のつかなくなりそうな例が沢山あるのである。

先に出した8語目ごとを空所にした問題の(6)には、今回の研究のための受験者1,580人から動詞の原形が61種類、過去形（又は過去分詞形）と現在分詞形が併せて10種類、その他が15種類、合計86もの反応が出ている。原形動詞の中からいくつか紹介してみると次のよう

1) 大塚九三子「言語テストの一考察——クローズ法について」『九州女子大学紀要』第14巻第1号, p.156.

である。

urge, stop, beseech, pray, entreat, ask, advise, convince, order, teach, request, cause, persuade, force, get, warn, beg, tell, dissuade, instruct, oblige, etc.

我々日本人教師に判断がむずかしい例として、以前筆者が発表した中からも紹介してみよう²⁾。

A nurse respects her (46) nurses and other people. To a (47) everyone is equal, no matter what (48) religion or the color of his (49).

(46) fellow, other, head, older, elder, colleague, senior, upper, superior, advanced, old, elderly, aged, leader, chief, own, companion, comrade, etc.

(49) skin, eyes, face, race, body, kind, country, clothes, nature, thought, hair, appearance, etc.

受験者からの答えを直観的に判断できるかできないかが、英語を母国語としている者とそうでない者のこの採点法に対する大きな見解の相違になるように思える。

そこで次に、自由を認めない original word 採点法を行ってみる気になるのである。材料として用いられた英文テキストの中の空所にあたっている単語を、書いていかないかで満点か 0 点を与えていくのである。だから原文の答えよりたとえもっと適切な答えがあったとしても 0 点にしてしまう。そうすれば当然のことながら、個人の得点もグループ全体の得点も、先の採点法による結果よりも悪くなる。これまでの研究でわかったことは、この厳しい採点法の結果が、先の any-acceptable-word 採点法の結果と十分に高い相関性を持ちうるということである。それのみか、これから述べようとする他の 2 つの採点法とも相関性は非常に高いのである。

次に、空所の数と受験者の数が多くなればコンピューターを使用しなければならなくなるのだが、native criterion 採点法がある。これはクローズ・テストの特色である「自由」な反応を出来る限り認めてやろうとする採点法であり、言語はコミュニケーションの手段であるとする言語観をそのままテストの中で受けとめている。母国語話者 (native criterion group) にも同じクローズ・テストを受験してもらい、それぞれの空所につき彼らの答えを頻度数の高い順に並べ、その支持率に従って

2) 伊藤弘子「Cloze Test (2)——4 つの採点法」『英語教育』大修館 XXVII : 3(1978年 6月) p. 32.

非母国語話者の答えに配点していくのである。たとえば、native criterion group の中には 60 人おり、ある空所について A と答えた人が 38 人、B と答えた人が 12 人、C と答えた人が 7 人、D, E, F が各 1 人いると仮定する。答えの種類と支持率がわかってくるので、非母国語話者グループの中で A と答えている人は $38/60$ 配点され、B と答えた人は $12/60$ 、C と答えた人は $7/60$ という具合に価値が与えられるのである。native group を criterion とみなすのである。採点者の意見や客観的、絶対的な正解にこだわらず、母国語話者からの反応は、支持率の低い単語ではあっても（たった 1 人でも）それ相応の尊敬を払うのである。もしも日本の学生達がスヌーピーの漫画などに親しんでいて、漫画の中で使われるような表現を答えたとするならば、同世代の母国語話者グループからもそのような表現があれば、ある意味で、そう反応した者同士にはコミュニケーションが成立していると言ってよいだろう。たとえ文法の規範から逸脱していてもである。

これまでの 3 つの採点法は広く知られているが、筆者は一つの試みとして、any-acceptable-word 法と native criterion 法の折衷を行ってみた。つまり native criterion group の反応のうち、ふるい分けられた「正しい答え」のみを対象に、その支持する割合で配点を決めるやり方である。native criterion group の反応は重んじられなければならないが、文法的、意味的、慣用的に「正しい」答えに関してのみ、彼らの支持率が有効でなければならないという考え方である。

以上の 4 つの採点法の結果は、どの 2 つの組み合わせも相関係数は非常に高く出ていることが証明された。つまりどの採点法を用いても出来る学生は成績がよく、出来ない学生は成績がよくないのである。

さてここで多肢選択法に関する少しく述べてみたい。この種のテストでは 4 肢選択なり 5 肢選択なりにするため、1 つの正解と残りの数だけ間違った答えを並べておくのが普通であるが、これら錯乱子を作る苦労は、英語が上級に進むにつれて増すように思われる。与えられた文脈の中でいかに魅力ある錯乱子を作るかは、多くの教師の苦労するところである。ところがクローズ・テストの副産物とでも言おうか、受験者達が答えたものの中で頻度数（支持数）が大きいのに正しいと認められない答えは、よい錯乱子になる条件をそなえているといえよう。まず同一のクローズ・テストを相当沢山の人に受けてもらい、第 4 の採点法を行っていく途中で、よい錯乱子となるべきものを集めていく。それらを用いて今度は、クローズ・テストの空所の場所ごとに正解と錯乱子を混ぜておき、選択させるやり方である。これが mul-

iple choice クローズ・テストと呼ばれるものである。純粹のクローズ・テストと多肢選択クローズ・テストの両方を同一グループに実施するという場合、まず初めに純粹クローズ・テストを実施し、その後で後者を実施すべきである。この結果、空所に適語を一つずつ入れなければならぬ形式で測られる能力と、与えられたものの中から選ぶ能力との、同一個人における違いをはっきり把握することができる。クローズ・テストがもっと解明されて来れば、多肢選択テスト全般の原理をはじめいろいろのことがわかつてきて、語学テストの分野に大きな進歩が見られるのは確実である。

III. むすび

言語の諸技能（聞く、話す、読む、書く）と要素（発音、語彙、文法力、文化的意味）を分けてテストするのは、到達度テストなどの時適切であるが、他方総合力を測るテストもある。クローズ・テストはその一つであろう。これまでの研究では、クローズ・テストと種々の英語のテストの相関係数が調べられているが、たとえば Darnell は標準化された TOEFL の下位テストのうち、聞く力のテストとの相関係数 0.736 を得ている。これは他のいずれの下位テストとの相関係数よりも高い。筆者も 1977 年に、集中英語コースで学ぶ大学一年生に関して、クローズ・テストと集中英語コースの中の種々のテストとの比較を行ったが、やはりクローズ・テストは聞く力と最も高い相関係数を得た。original word 採点法

(p. 20 よりつづく)

究が進められ改良がなされているし、このオーラル・インタビューの実用性の面を補う（一度に 1 人の受験者が限度であるオーラル・インタビューに対し、LL を利用して一度に多数の受験者をテストする）試みとして生まれ開発された「LL を利用した口頭発表能力試験」——イギリスの ARELS (The Association of Recognized English Language Schools) の開発した The ARELS Oral Examination や、アメリカの ETS (Educational Testing Service) の Test of Spoken English 等——が新しいテストの形式として注目される。

これら英語能力テストに対してのニードが多様化している現在、すべての要求を満足させ得る唯一最良のテスト（方法）は存在しないと考えられる。また「コミュニケーション能力／機能的言語能力」測定のテスト開発に関しては、未だその能力自体について充分に解明されていない現在、テストの妥当性の証明及びテスト結果の解

では 0.4800、native criterion 採点法では 0.5171 であった。なぜ聞く力と、無意図的に作られた空所をうめる力が特に密接に関係するのか今後の研究を待たねばならない。

クローズ・テストの結果がさまざまな英語テストの結果とくらべられて、プラスの相関係数のみを示したこととは、結局英語力全般と深い関係を持つことを意味している。Taylor がクローズ・テストを最初に用いた目的は、あるひとまとまりの英文の readability を見るためであったし、Nida の目的は翻訳の良否を見るためであった。今日ではクローズ・テストは失語症患者の症状を調べるのも使われている。

これからもし可能であれば、受験者の「論理的に考える力」を測定した結果及び「母国語話者らしさ」を測った結果とクローズ・テストの結果を是非くらべてみたい。「母国語話者らしさ」に関しては、そのようなものを直接測るテストが見当らないので、一つの工夫として、日本語を母国語としつつ英語圏に 1 年以上住んでいたことのある高校生グループと大学生・大学院生グループにクローズ・テストを受験してもらい、英語圏での生活経験のない日本人大学生グループと目下比較研究をやっているところである。惜しくもこのペーパーで報告するのには間に合わない。英語圏内で生活したグループの成績が、英語母国語話者グループよりも悪く、一般の日本人大学生グループよりも良いということになるであろうか。

（相模女子大学助教授）

積において、理論的・実際的にいろいろ難しい問題を含んでいることは否定できない。しかしながら英語（言語）テストの社会的・教育的役割を考えるとその重要性は測り知れない。今後とも現状に則した信頼できる英語能力テストの開発が期待される。（ELEC 研修部研修主任）

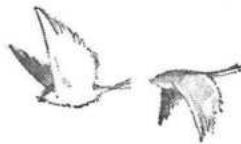
▶ 原稿募集

『英語展望』では読者からの原稿を募集しております。教材・教授法に関する実践研究や語法研究など、内容は自由ですが未発表のものに限ります。分量は原則として 400 字詰原稿用紙 20 枚以内で、掲載分には所定の原稿料をお贈りします。なお応募原稿はお返しできませんので、コピーをご用意下さい。

▶ 年間予約購読のおすすめ

本誌の年間予約購読をおすすめいたします。購読を希望されるかたは年間購読料 2,300 円を添えて当出版部に直接お申し込み下さい。

最近の英語(言語)能力テストの傾向



野 口 肇

I. はじめに

我々の関心が「コミュニケーションのための口頭運用能力の習得」に向けられて以来、いろいろな英語教授法が考え出され、それと共に、その能力を測定するための英語能力テストが開発され実施されてきた。「言語テストの最も根本的な変化は現代言語教育の変化に追従してきた¹⁾」とはミシガン大学のジョン・アプシャー教授(John A. Upshur)の言葉であるが、我々が言語テストを考える際に、その時代の言語学・心理学等の分野における理論を無視することはできない。

過去の流れをふり返ってみると言語テストは、1960年代の比較分析(contrastive analysis)・行動主義的心理学(behaviorism)の影響を受け発達したといえる。この時代には学習言語(target language)と母国語(native language)を音体系・単語・文法体系という面から比較し、その違いに焦点をあて、言語の小さな要素(components)及び技能skillsの組み合わせから成る総合体を「言語能力」とし、その知識の量を測定するという分析的見解(analytical view)に基づき作成されたテストが主流であった。TOEFL(Test of English as a Foreign-Language—英語を母国語としない留学志望者に対する英語能力テスト)が現われたのもこの頃であり、採点の容易さが重要視され、この種のテストが広く受け入れられた。

しかしながら60年代後半には、この種のテストに用いられる部分的測定法(discrete-point approach)に対して理論的な面からの批判がもちあがったほか、テストの妥当性の面からも「コミュニケーション能力測定のためのテストとして真にその能力を測定しているかどうか」という点において検討され始め、それと同時に、より信頼できる英語能力テストの研究・開発に関心が向けられてきた。

1) "The most fundamental changes in language testing have followed major changes in modern language teaching." *The Linguistic Reporter*, June, 1974.

II. 現在の新しい英語(言語)能力テスト

言語学・心理学及びその他関連分野における研究が進み、人間の言語・言語行動・人間の言語能力についてより深く分析されてくると共に、従来の学習者の言語能力を説明する言語分析的見方及びそれに基づき作成されたテストによる測定は、必ずしも我々がめざした「コミュニケーション能力」をテストしていたわけではなく、一部の限られた言語能力の測定に限られていたことを、多くの学者が認めるに至った。そして実際のコミュニケーション行為において必要とされる能力を測定するためには、単にどの位の音体系・単語・文法を知っているかという、知識の分析的・量的測定では不充分であり、この能力は言語をいかに活用できるかという「機能」を伴うものであるから、「どれだけコミュニケーションできるか」という点から総合的(integrative)・機能的(functional)に測定すべきであるという主張が主流を占めるに至った。これは従来の比較分析に代表される特定の言語のみに焦点をあてるという狭い見方を逸脱し、より広い視点で、言語本来の特性である余剰性(redundancy)・創造性(creativity)と言語の機能に目を向け、コミュニケーションの場において実際に機能する能力を、学習者がどの位もっているかを測定することに焦点があてられているという点で、テスティング分野における著しい進歩であったといえる。そしてこのためのアプローチとして、実際に学習者の頭の中にある言語能力を引きだし、その機能性をみるという意味で、言語使用テストが有効であると言われている。以下、現在「機能的英語(言語)能力」測定のための試みとして実施されているいくつかのテストを紹介し、それらのテストの基盤となる理論的根拠を述べることにより、現在の英語(言語)能力テストの傾向を掘り下げてみたい。

1) ノイズを利用した聴解力テスト

この言語能力測定の1つの試みとして、ニューケンシコ大学のバーナード・スボルスキー教授(Bernard Spols-

ky) のノイズを利用した聴解力テストが挙げられる。これは、母国語話者の「言語を知っている」という概念を、「言語にゆがみが生じても（余剰性が減少しても）送られたメッセージに対して妥当性のある推測（つまりメッセージの意味を把握すること）ができる能力を含む」という仮説をたて、テストの際に聞き取りの文にホワイトノイズ（あらゆる周波数の音を均等に含んでいる雑音）を加え、その理解の度合いによって機能的言語能力が測定・評価されると主張している。彼によると言語能力は、一定の言語要素を知っているという知識の量の問題ではなく、言語の余剰性にも代表されるように、言語要素は互いに補なって機能するものであり、必ずしも一定の知識量（特定の要素を知っているかどうか）の測定はあまり妥当性がないこと、また今まで聞いたことのない発話を理解することができる能力及び言語のもう一つの特性である創造性を、テスト作成においては重視しなければならないこと等を強調している。

2) Productive Communication Testing

このテストはミシガン大学のジョン・アブシャー教授のもとで現在開発中である。このテストにより彼は実際のコミュニケーション行為において、話し手（speaker）と聞き手（hearer）の間で行なわれていることを分析し、コミュニケーションの1つのモデルを設定することにより、話す能力（oral production ability）を測定しようと試みている。彼によると現在の言語テストに欠けているものは、創造的言語使用とコミュニケーション言語使用のモデルであり、「創造的なコミュニケーションとは話し手の言語行動により、聞き手が‘新しい’概念をつくりだすことであり、話し手の頭にある概念と聞き手の受けたメッセージから生まれた概念が一致することにより、コミュニケーションが成立する」とコミュニケーション行為を分析している。実際のテストにおいては、受験者は4枚の（それぞれ行動の異なる——例えば、帽子をかぶっている／帽子をかぶっていない男が階段をおりている／のぼっているといった——4つの動作の）絵を見て、その中の1枚の絵を聞き手である試験官に1文で表現する。そして受験者の意図した絵と、試験官がメッセージを受けて選択した絵が一致した場合に、コミュニケーションが成立したとして、受験者に得点が与えられる。彼はこのテストの実験を通して、受験者が絵を口頭で伝達するために与えられる時間の制限が、伝達能力測定をする上で重要な役割りを果たすことを報告している。つまり、たとえ能力が乏しい受験者であっても、充分な時間を与えられればコミュニケーションができるが、時間の制限をきびしくするにしたがって、コミュニケーションの量に

おいて個人差が顕著に表われてくるということであり、これは注目すべきである。

3) Cloze Test (Procedure) / Dictation

これらのテストに関しては多くの学者が注目をしていたが、特にニューメキシコ大学のジョン・オラー教授（John W. Oller, Jr.）は、これらのテストの「実用的言語能力（彼はこれを pragmatic proficiency と呼んでいる）」測定における有効性に注目し、実験を通じてその妥当性を報告している。彼によると言語習得の過程はその言語の文法（一般的な意味での文法ではなく、もっと広い意味の言語体系全般）を内面化（internalize）していく過程であり、それはすなわちその言語の母国語話者が、頭の中に持っている能力（彼はこれを expectancy grammar と呼ぶ）に近づいていく過程でもあり、したがって実用的言語能力を測定することは、学習者が学習を通して頭の中に内面化あるいは消化した expectancy grammar の効率性を測定することであると言う。またその内面化された能力を測定するためには、その能力自体に「働きかけ」その能力を充分に「機能させる」ことができるテストが要求され、この能力を測定するために用いられるテストは、次のような基準を満たしている必要があるとしている。彼の説によると、テストは「普通の（自然な）文章や談話（discourse）と同じように時間的な流れ（展開）をもつていることが必要であり、言語の連続体を単語及び文のレベルにとどまらず、より有意味な文の集合体、あるいは言語を超えた文脈（extralinguistic context）にまで結びつけて処理（生成及び理解）させることを受験者に強いだけの機能を持っている」ことが不可欠であり、それが学習者の expectancy grammar を呼び起こす働きをするという。その意味で Cloze Test や Dictation は有効なテストであると述べている。これらのテストにおいても言語の余剰性・創造性及び人間の創造力等がその理論的根拠になっていることが注目される。

III. む す び

以上、現在開発及び実施されている英語（言語）能力テストの例を挙げて、その測定する能力及びその理論的根拠を述べてみたが、もちろん英語（言語）能力テストはこれらにつきるわけではない。

例えば採点基準の妥当性及びテスト自体の妥当性（1度の短いインタビューがどの程度受験者の他の言語行動を予測できるのかという点）等に問題があると言わわれているオーラル・インタビューについても、いろいろと研

（p. 18 へつづく）



アメリカの人種と民族(Ⅱ)

國 弘 正 雄

なぜアメリカが人種や民族のるつぼ——あるいはモザイク——でありうるのか、今回はその法律的な根拠から入っていこうと思います。

さもないと、なにゆえにアメリカがあれほど多種多様な皮膚の色や、言語や、民族的背景の人間を、ひとしづみにアメリカ人——より厳密にはアメリカ市民——としてかかえているのか、判らないからです。

とくにお互い日本人のように、その発生やルーツはともかく、今日では高度の單一性をその特長とし、異人種異民族をほとんど持たず、(よくも悪しくも)純粋培養的な社会に住んでいる場合には、なおさら理解に困難を覚えるからです。

そこで、やや古いのですが、私の講演を所収した『国際英語のすすめ』(実日新書)の、「アメリカはどんな多様性をもっているか」という一文から若干の引用をさせていただき、このあたりの事情を明らかにしておきたいと思います。(同書 pp. 201~204)

まず第一に、ではこういうたくさんのいろいろな多様性を持った人間が、しかもみなアメリカ人を称しているのはいったいどういうわけか、ここに出てくる考え方かたがいわゆる属地主義という考え方かたである。

これはつまり国籍を決める際の方法であって、世界で現在行なわれている大きなものに2つある。ひとつは属地主義(Law of the Soil)という考え方かた、もうひとつは属人主義(Law of the Blood)。どういうことかというと、たとえば1人の人間が生まれた際に、その人間がどこの土地で生まれたかということによってその人の国籍はその土地に帰属するのだという考え方かたが属地主義である。つまりある1人の人間がアメリカの国旗のひるがえっているところで生まれたとすると、属地主義によれば彼はとうぜん国籍はアメリカに属する。

それに対してどこで生まれたかではなくて、何人を父として生まれたかということによって決まってくる

のが後者の考え方かたである。ところがアメリカを含めて世界の多くの国は属地主義をとっている。つまりアメリカの国旗のひるがえっているところで生まれた人間は、おやじがアルメニア人かもしれない、チェコスロヴァキアの無政府主義者かもしれない、イスラム教徒で一夫多妻を実行しているかもしれない、そういうことにいっさい関係なしに、その子供に関するかぎり、彼はアメリカ市民であるという考え方かた、これが属地主義の考え方かたである。

どこで受胎したかで決めた国籍

極端な場合は、これは私の身の回りに実際おきたことだが、私の友人夫妻がアメリカに住んでおり、妊娠して日本に帰ってきた。ところがまた彼の予定が変わって、結局彼はアメリカに永住したほうがいいということになって、アメリカに戻ることになった。子供は日本で生まれたのだが、私の友人は、われわれはアメリカに永住するのだ、子供はアメリカにずっと一生住むことになるだろう。その場合やはり子供はアメリカの市民権を獲得しておいたほうが便利であるに違いないと考えたのである。そこで弁護士その他と相談して、日本で生まれた、つまり属地主義的にいえば日本で生を受けたわけだからアメリカ市民権を取り得ないのだが、何とかしてアメリカ市民権を取ってくる方法はないかと考えたのである。その結果、アメリカで受胎したということを証明する資料をアメリカから取り寄せて、大使館に持っていく、アメリカ市民権を取得することができた。文字どおり made in USA. (笑)

世界の大勢は属地主義

日本では考えられないことである。もしそういうことにすればそちらにウロウロしているアメリカ人の子供はぜんぶ日本国籍になる。そんなばかなことは考えられない。それはなぜかというと、われわれが原則として属人主義のみをとっているからである。ところが

世界の現在の大勢としては属地主義をとっている国が非常に多い。アメリカがそうだし、英連邦に属する国ほとんどすべてがそうである。若干の制限条項を設けているところもあるが、いわゆる開発途上国でも多くが属地主義である。

それに対して属人主義をとっているわれわれの場合は、日本人を父としていれば、世界のいずこの果てにおいて生まれようとも彼は日本人であるという考え方だから、ときと場合によっては二重国籍の問題が出てくる。

アメリカの属地主義によればアメリカに生まれたからアメリカ人であっても、日本人を父としているから日本人だという2つの間にoverlapするところが出てきて、それが二重国籍という問題の発端になる。

したがって、先ほどいったようなアメリカの多様性を支えている基本的な理念というか、基本的な考え方たというものはやはりひとつは属地主義ということである。つまりアメリカの旗のもとに生まれればとにかく彼はアメリカ市民なんだという考え方た、これがこういう多様性を可能にしているひとつの原則であるということがいえようかと思う。

このように、アメリカ人にとって大切なのはアメリカという土地で生を享けた、ということですし、市民権という概念なので、日本のように、(日本人の)血液、それに国民、という概念ではないのです。

両者のこの点での差異は、きっと頭に入れておく必要があります。

市民のことはむろん citizen、市民権は citizenship といいます。

いくつかの用例を吟味してみましょう。

She told reporters later that the Con Con, by modifying the act in Hawaii's Constitution, could set the stage for an eventual U.S. Supreme Court decision on whether the act unconstitutionally treats Hawaiians as a "special class" of citizen.

Beamer said state legislators have been reluctant to seek amendments to the act for fear Congress might focus on its possible unconstitutionality. But the result of that fear has been an act that has hampered the Hawaiian from receiving first-class status as a citizen, she said.

(*The Honolulu Advertiser*: July 14, 1978)

(大意：あとで彼女は記者に対し、その措置をとればハワイ州憲法でその法令の修正を行なう破目になり、ひいては当該法令がハワイ原住民を「特殊クラス」の市民として扱っている点で連邦最高裁の違憲判断への、いわばお膳立てをすることになりかねぬ旨を述べた。)

また彼女は、州議会の議員がこの法令に関する修正案に熱心でなかったのは、議会によってその違憲性がつつかれるのを怖れてのことであった、とも述べた。もっともその怖れの結果としてハワイ原住民が第一級市民の資格を得ることを妨げるような法令が生まれたのだから、皮肉この上ないというのが、彼女の見方である。)

第一級市民、第二級市民といいう方がよくアメリカでは聞かれるのですが、もちろんこれは法律上の差別ではなく、事実上の優位劣位のことです。

この辺の事情については後ほどこまかく触れるとして、かつて日系人一世はアメリカ市民権を得られなかつたという事実があります。

このあたりの実情を以下の筆者は次のように申します。市民権を認められなかつた日系人一世の悲哀と、その故の二世三世の苦悩についての文章です。

DISCRIMINATION. Impediments to the assimilation of Issei cut them off not only from American society but also to some degree from their native-born sons and daughters. Ineligible for citizenship, Issei were generally excluded also from trades and professions that require a license; in the mainland states where most Japanese lived, they were forbidden to own land. Young as they were, therefore, Nisei often had to act as intermediaries between their families and the broader community—for instance, as the legal owners of the land their fathers worked or, in the camps, as the interpreters to the older inmates of the rulings that governed all their lives. If the restrictions that Issei parents set were unreasonable by general American standards, then they must have seemed triply so to adolescents, or even children, called upon to play adult roles.

(William Petersen: *Japanese Americans*, pp. 202—203)

(大意：一世が同化する上に横たわるさまざまな障害のため、彼らは単にアメリカ社会から切りはなされたばかりでなく、ある程度まではアメリカ生まれの息子や娘たちからも疎外されてしまった。)

市民権をとる資格を欠くままに、彼らはライセンス

を必要とする職業や専門職からもはじき出されることが多く、日系人のほとんどが居住していた米本土では、土地の所有も禁じられていた。

そこで、二世が若い身空で、家族と世間との間で仲介役をつとめなければならないことになった。たとえば父親の勤労の場としての土地は彼ら名義とされ、収容所内部では、年配の被収容者のために、彼らの生活の一切合切をしづらっていた規則を解釈し伝達してやるなど、年に似合わぬ役割をはたしたのである。

一世の両親が彼ら二世に課した規制は、アメリカの一般的な物差しからするなら、いかにも不条理であったが、大人の役わりをさせられた当の青少年や、年端のゆかない子どもたちにとっては、なおさらだったに違いない。)

日系人は unassimilable (同化不能) であると決めつけられ、土地の所有や各種資格の獲得にあたり、さまざまなハンディを背負わされたのです。

ただし二世は、アメリカの版図内で生を享けたという理由—by virtue of his birth on American soilなどとよく申します—で、れっきとしたアメリカ市民でしたから、二世の名義で土地を所有したり、その他の活動を行なったものです。

もっとも太平洋戦争が勃発するや、二世も含めた日系人が、大統領行政命令第4020号により、収容センター(relocation center) という名の強制収容所に入れられ、大へんな苦難を強いられたことは、皆さんもご案内のように、最近になって漸く公式の謝罪と補償の途が講ぜられたところです。

次の用例は日系人収容についてのものです。オレゴン州元知事の文章からとりました。

For the Japanese of Oregon had been through a traumatic period after Pearl Harbor. Those of Japanese ancestry, as it was euphemistically put, had been "relocated"—taken from their established homes and placed in compounds where they could be watched.

(Mark O. Hatfield: *Not Quite So Simple*, p. 89)

(大意: なにしろオレゴンの日系人は真珠湾のあと、悪夢のような経験を経ていたのである。日系人は体よく「移住」させられ、住みなれた家を捨てて監視つきの収容所に入ることを余儀なくされたのだった。)

なおこのあたりの経緯と、英語の表現について、くわしくは小著『アメリカ英語の婉曲語法』(下) (エレック

出版部) におつきいただければ幸いです。

ところで、市民であることを証明する書類を、citizenship papers と申します。

日本とはちがい、戸籍制度が完備していないあの国のこととて、病院の出生証明書や、教会での洗礼証明書といったものを取り揃えるなど、いわば傍証をかためる(!) ことで、アメリカ市民であり、ある特定の地域の住民であることを確認してもらうのです。

戸籍という面では、日本は世界に冠たる先進国(?)といえるように思います。便利でもあり、全国民総背番号制などのからみを思うと、空怖しくもなります。

Jimmy was going to Birmingham to take out citizenship papers [establish state residency] in Alabama, says Jerry. "He believed that if he killed King in Alabama or if he killed him anywhere in the South, it would help him if he showed he was a resident of Alabama...Of course, if he killed King in Alabama, he believed Wallace would eventually pardon him, not at first but after a few years, when things had cooled off."

(Time: Jan. 26, 1976, p. 29)

(大意: ジミーはバーミングハムに出かけ、市民権関係の証明書類をつくってもらい、アラバマ州での居住権を確立しようとしていたのだ、とジェリーはいう。

「キング牧師をアラバマ、もしくは南部のどこかで殺した場合、アラバマ州の居住権をもっているのはなにかと便利であるに違いない、とあいつは思いこんでいた。……

それにもしアラバマで殺した場合には、ウォーレス知事が大赦してくれるかも知れない。殺してすぐはダメでも、何年か経ってすこし騒ぎが収まってからなら、とも思ひこんでいたんだ」とはジェリーの弁である。)

上例でキング牧師とは、むろん黒人運動のリーダーで、ノーベル平和賞を受けた Martin Luther King 師のこと。一方、ウォーレス知事というのは、ペンシルヴニア大学の C. J. バーネット教授(政治学)に、「アドルフ・ウォーレス」とヒトラーばかりの大衆煽動家扱いを受けた、悪名高いデマゴグ政治家のことです。

ウォーレスなら、キング殺害の罪をうやむやにしてくれるかもしれない、とこのジミーなる would-be assassin は思ひこんでいた、というわけです。

州によって法律——その基礎としての慣習や習俗や気

分も含め——がかなり大幅に異なるアメリカだけのことはあります。たしかに死刑にしても、州によっては全く認めていないところもあるのです。もっとも伝統的に死刑 (capital punishment) に熱心 (?!) だったのは南部、なかんづく the Deep South (深南部) 諸州であったことも付け加えておきましょう。

ところでききほどの第一級第二級市民うんぬんの話に戻ります。黒人をはじめとする、非白人や、新教徒以外の(たとえば)カトリック教徒、アメリカ以外のどこか外国で生まれた市民などは、とかく一級下のような扱いを受けてきたのです。アメリカではなんといっても White Anglo-Saxon Protestant—WASP と略されます——が少なくとも従来は一級とみなされてきたのです。

WASP という用例については次回にでもご紹介するとして、ここでは second-class citizen という表現が比喩的に用いられている例を1つ2つご披露しておきましょう。

Citizen という語のもつアメリカ的重みを、うらから例証しようというわけです。

ご了承下さい。

きいしょは夫婦の間柄についての、ユーモラスな一文です。

And what about the wife who treats her husband like a *second-class citizen* and refuses sex, but is hurt and martyred when he finds another woman with whom to share love and companionship?

(Honolulu Star Bulletin: April 1, 1976)

(大意：亭主をあたかも一段ひくいかのように見なし、同衾を拒みながら、亭主がほかの女性とご親密で、情を通じていると知ったらさいご、すっかり傷ついて、自分を悲劇のヒロインに仕立てたがるようなワイフは、いったいどう考えたらよいのだろうか。)

訳はむろん意訳です。

けがらわしいかのように、と訳してもよかったですかも知れません。一方、martyred というのは、文字通りにはむろん、殉教者とみなす、ということです。でも日本的には、悲劇のヒロイン、といった方が多少は自然かと思います。

次は日本の自衛隊に関する記事から採りました。

Concerning the second element, Japan's military officers have almost no influence in national life. The military service is not a favored profession

with the Defense Academy and the enlisted ranks never full, and soldiers are still regarded as *second-class citizens*.

(The New York Times: June 5, 1975)

(大意：第二の点については、日本の自衛隊幹部は国事についてほとんど何の影響力ももってはいない。

軍務というのはあまり結構な専門職とはみなされておらず、防衛大学も一般隊員も、いつも定員を下まわっており、自衛隊員は、木の端のように考えられている。)

木の端のように、というのももちろん大意訳で、清少納言の『枕草紙』から借用しました。あそこでは法師でしたが、いまの日本では自衛隊員だ、というわけです。

もっとも、防衛力増強の大合唱が空怖しいまでのスピードと圧迫感で増大しつつある今日このごろでは、このニューヨーク・タイムズ紙の記事も、いまは昔、ということかも知れません。

「群れてなだれる」日本人の性向を考えると、いまの防衛力増強の大合唱が、日本をとんでもない方向にもっていきかねないと怕れるのは、はたして私一人でしょうか。

ついでですが、これまた Citizen という語の重さを示す表現として、大統領、副大統領のことを、それぞれ the First Citizen, the Second Citizen と呼びならわす習慣があるのをご存じでしょうか。

以下の用例をどうぞ。

Now, on the eve of his 57th birthday, Richard Nixon was tanned, rested and ready to leave California's sun for the snow and subfreezing temperature of Washington. But first the *First Citizen* wanted to register in California for the 1970 elections.

(Newsweek: Jan. 19, 1970, p. 23)

(大意：57歳の誕生日を明日に控えたニクソンは、日焼けし、十分な休養もとて、カリフォルニアの陽光を後に、雪と零度以下のワシントンに戻ろうとしていた。)

でも、この第一市民たる大統領にとって、まずやるべきことは1970年大統領選挙用の登録をカリフォルニアで済ますことであった。)

一方、次は第二市民としての副大統領についてです。もっともこっちの方は、若干の例外はあるにしても、

とかく閑職とみなされ、現にこのポストに坐った何人かが、自嘲的な言を吐いています。

Prestige and the Vice Presidency have traveled separate routes through most of the nation's history. John Adams, the first man to become the "Second Citizen," considered himself in the most insignificant office that ever the invention of man contrived." Theodore Roosevelt, the 25th Vice President, said the job was "a stepping-stone to... oblivion." And crusty old John Nance Garner, 32nd Vice President, tried the office and decided it was "not worth a pitcher of warm spit."

(Newsweek: July 28, 1967, p. 19)

(大意：副大統領職と栄誉とは、アメリカ史を通じ、だいたいがお互いに無縁にすごしてきた。

このポストについて最初の男ジョン・アダムスは「人間が考え出した椅子のうちで、もっとも無意味なもの」とみなしていた。25代目の副大統領のセオドア・ローズベルトは、「これは——人に忘れ去られるための、恰好なポスト」と呼んだ。そして32代の副大統領をつとめた、ガーナー老人は、彼一流の口の悪さで、「タンツボ一杯のツバほどの値打ちもありやしない」とのたもうたものだ。)

いやはやサンザンですね。でも、ひとたび大統領の心臓の鼓動(heartbeat)がとまれば、大統領に昇格するわけですから、そうバカにしてばかりはおられぬわけです。大統領と副大統領は“only a heartbeat away”といわれる所以このためです。

何れにせよ、繰り返すようですが、アメリカにおける市民という概念と表現のウェイトの大きさは、十分にお判りねがえたことだと思います。

さいごにつぜひ申し上げたいのは、アメリカではcitizenとnational——国民と仮訳しておきます——を較べた際には、citizenの方が上位概念である、ということです。

市民の方が国民よりも上だ、というのは日本人の常識ではまったく考えられないことで、市民革命を経ないまま日本国民になってしまった日本と、イギリスでの市民革命や、市民意識の形成を継承しているアメリカとの差異は歴然としています。

アメリカでnationalというと、実は属領の民というのです。かつてのフィリピン人は、American citizenとしての権利や（より多くは）義務こそ与えられていま

せんでしたが、American nationalとしての義務や（より多くは）権利だけは持っていたのです。

今日では、米領サモアの人々がこのnationalにあたります。

以下の引用のlesser statusというところにご注意下さい。

Unlike the people of the Northern Marianas, the 30,000 or so Polynesians who make up the bulk of the population of American Samoa have rejected American citizenship, preferring the lesser status of "nationals." Samoans fear that adoption of the American Constitution would be incompatible with their ancient system of communal land ownership, administered by clan chiefs, and other customs.

(Pacific Stars & Stripes: Feb. 27, 1980)

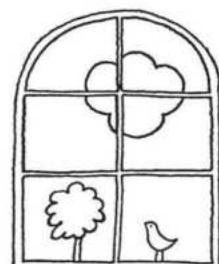
(大意：北マリアナ群島の島民とは異なり、米領サモアの人口のほとんど大部分を構成しているポリネシア系ほぼ3万は、アメリカ市民権を拒否し、あえて「国民」という一段ひくい資格をえらんだ。

もしアメリカ市民になり、アメリカ憲法を受け入れることになったら、彼らがもっている昔ながらの集団土地所有制度やさまざまな習俗など、部族の長（おさ）によってとり行なわれてきた慣行にそぐわないのでは、というのが、彼らにとって気がかりな点なのである。)

ヨーロッパ以来の伝統の上に立つcitizenということばのもつ歴史的な重み——これはありきたりな辞書や文法書からはうかがい知ることのできないものといえるでしょう。

外国語を、その内包と外延の両方で、しかも通時的と共時的の両面で捉えることのむずかしさ（とともに興味ぶかさ）をしみじみと思い知らされるのです。

(国際商科大学教授)





漱石のロンドン(その7)

伊村元道

19. お上りさんの名所見物

漱石がロンドンに到着したのが明治33年(1900年)10月28日、その翌日から彼は市中を歩き始める。29日には昼は「岡田氏ノ用事ノタメ市中ニ歩行」、夜は「美濃部〔達吉〕氏ト市中雜踏ノ中ヲ散歩」している。翌30日には公使館まで出かけている。当時の日本公使館の所在地は4 Grosvenor Gardens, S. W. といって、Victoria Stationの近くであったから、漱石の最初の宿所76 Gower Street, W. C. からは、いわば本郷から赤坂へといった感じで、市の中心部のほとんどを通って行ったことになる。20遍も道を聞いてようやく宿に帰った。名所見物を始めたのは31日の水曜からで、そのころの彼のお上りさんぶりは、のちに「倫敦塔」の冒頭で次のように回想されている。

2年の留学中ただ1度倫敦塔を見物した事がある。

行つたのは着後間もないうちの事である。そのころは方角もよく分からんし、地理などはもとより知らん。まるで御殿場の兎が急に日本橋の真ん中にほうり出されたような心持ちであった。……

しかも余は他の日本人の如く紹介状を持って世話になりに行くあてもなく、また在留の旧知とては無論ない身の上であるから、こわごわながら1枚の地図を案内として毎日見物のためもしくは用足しのため出あるかねばならなかつた。無論汽車へは乗らない、馬車へも乗れない、滅多な交通機関を利用しようとすると、どこへ連れて行かれるか分からぬ。

この広い倫敦を蜘蛛手(注:四方八方)十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何等の便宜をも与える事が出来なかつた。余はやむを得ない

から四つ角へ出る度に地図を開いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時はまた他の人に尋ねる、何人でも合点の行く人に出会うまでは捕えては聞き呼び掛けては聞く、かくしてようやくわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのはあたかもこの方法によらねば外出の出来ぬ時代の事と思う。

日記によれば、この日は「Tower Bridge, London Bridge, Tower, Monumentヲ見」といる。当時の写真(*The Descriptive Album of London, 1897*から)を眺めながら、次に掲げる『ベデカ』(1911年の第16版、漱石が使つたのは1898年の第11版)の解説をお読みください。まずは童謡で有名な「ロンドン橋」から。

London Bridge, until 1769 the only bridge over the Thames in London, and still the most important, connects the City with the Borough, on the Surrey side of the river.

The present London Bridge, about 60 yds. higher up the river than the old bridge (removed in 1832), was



London Bridge



The Monument

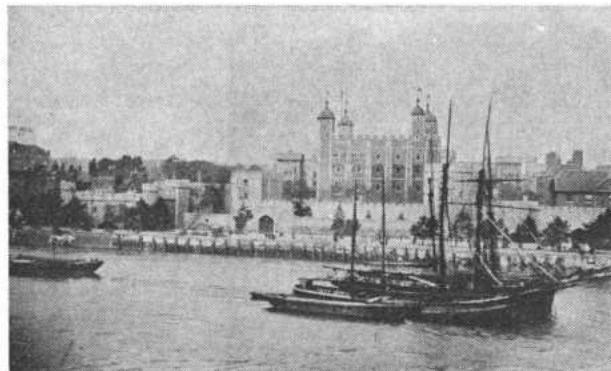
designed by John Rennie, a Scottish engineer, begun in 1825 and completed in 1831. ... The bridge, 928 ft. (280 m) long and 63 ft. broad (54 ft. until 1904—この年拡幅工事があった), is borne by five granite arches, of which that in the centre has a span of 152 ft....

It is estimated that, in spite of the relief afforded by the Tower Bridge, 22,000 vehicles and about 110,000 pedestrians cross London Bridge daily, a fact which may give the stranger some idea of the prodigious traffic carried on in this part of the city. (pp. 131-2)

ちなみにこの橋、1973年には3度生まれかわり、古いほうはアメリカに買い取られて行った。次は「(大火)記念塔」である。

An admirable survey of the traffic on the bridge as well as on the river is obtained from **The Monument**, in Fish Street Hill. This consists of a fluted (縦みぞを彫りつけた) column, 202 ft. (60 m) in height, designed by Christopher Wren, and erected in 1671—77 in commemoration of the Great Fire of London in 1666. ... A winding staircase of 345 steps ascends the column to a platform enclosed by an iron cage (added to put a stop to suicides from the monument), above which rises a gilt urn with blazing flames, 42 ft. in height. (pp. 132-3)

次は The Tower つまり「ロンドン塔」であるが、これは漱石の短篇にも詳述されていることであるから省く。ただ、あの中には史実の誤りや固有名詞の発音の間



The Tower

違いがあるという指摘が最近いくつかなされているが、それは作品論にゆずろう。そもそも、漱石が「ただ1度見物」したというのが事実なら、その10月31日という日のロンドンには雨は降らなかつたというから、作品のイメージとはだい

ぶちがうが、それも作品論に任せることにしよう。よく隣りの「ロンドン橋」と間違えられる「タワー・ブリッジ」は意外と新しく、ロンドン新名所の一つだった。

Immediately below the Tower the Thames is spanned by the huge **Tower Bridge**, built by the Corporation in 1886—94. This bridge, designed by Sir Horace Jones and Mr. Wolfe Barry, comprises a permanent footway, ...and a carriage-way, the central span of which (200 ft. long) is fitted with twin bascules or draw-bridges, which can be raised in 1½ min. for the passage of large vessels. The bascules and footway are borne by two massive Gothic towers, rising upon huge piers, which are connected with the river-banks by permanent spans, suspended on massive chains hanging between the central towers and smaller castellated (城郭風の) towers on shore. (p. 143)

というわけで、漱石の来るわずか6年前に完成したばかりで、写真はその開通式の光景を示している。いまちょうど跳ね橋が上っているところであるが、これも最近ではほとんど開かなくなってしまった。

20. 博物館・美術館めぐり

11月3日には British Museum を訪れている。ごく最近、1973年からは博物館と図書館が分離されたが、それまではこの2つを兼ねた大施設。漱石はよく人をここへ案内したが、それは博物館・美術館の部分で、他の多くの留学生のように、ここでの図書室を利用することは少なかった。「自転車日記」にこうある。

「……お調べになる時はブリッッシュ・ミュージアムへお出掛けになりますか。」

「あすこへは余り参りません、本へやたらにノートを書き付けたり棒を引いたりする癖があるものですから。」

同じ日、Westminster Abbey も見ているが、なか1日おいて、5日にもふたたび行っている。日記にある「見ル」がどの程度の見学を意味するのかはわからないが、まさか外から眺めただけというのではあるまい。同じ日 National Gallery も「見」ている。ここも、ドイツなどから留学生が来ると、漱石がきまって案内した場所である。ここで漱石はホガースの6枚つづきの“Marriage a la Mode”(『当世風結婚』)などを見たようである。(『文学評論』第2編第3章)

もうひとつロンドンの代表的な美術館 Tate Gallery を漱石がいつ訪れたのかは明らかでないが、『永日小品』の「霧」には、「ヴィクトリヤで用を足して、テート画館の傍らを河沿いにバタシーまで来ると」とある。『ベデカ』にはこうある。

The Tate Gallery, officially styled the National Gallery of British Art, was built and presented to the nation, along with a collection of 65 modern paintings, by Sir Henry Tate (died 1899). The building, opened in 1897, enlarged in 1899, and farther extended in 1910 by the addition of the Turner wing, presented by Sir Joseph Duveen, is in a free classic style. (p. 237)

というわけで、1900年当時はここもまた出来てのほやはやであった。「この美術館は、『坊つちやん』に出て来るターナーの作品がたくさん集められているので有名であるが、ラファエル前派やビアズレイなど、英國19世紀末芸術の蒐集でも知られている。そこでダンテ・ガブリエル・ロセッティの『聖ジョージと王女サブラの結婚』、バーン=ジョーンズの『シドニア・フォン・ボルク』、ウィリアム・モリスの『王妃ギネヴィア』などが陳列されている一室にはいった瞬間に、私はある衝撃を受けて立ち止まった。眼前にくりひろげられていたのは、ほかならぬ『浪漫的』漱石の世界——より正確にいえば『漾虚集』の世界だったからである。」と江藤淳氏は書いている。(『夏目漱石』新潮文庫, p. 393)

11月11日の日記に「Kensington Museum ヲ見ル、Victoria and Albert Museum ヲ見ル」とあるが、この2つは実は同じものなのである。これは美術工芸館ともいるべきもので、近代工芸の進歩の跡を目で見てわかるように展示している。また『ベデカ』を引く。



Tower Bridge

The South Kensington Museum, since 1899 officially styled the Victoria and Albert Museum, ...was originally opened in 1857 in a temporary structure....The erection of permanent buildings was begun immediately afterwards and various portions were opened as they were completed,...In 1899 Queen Victoria laid the foundation of additional buildings, designed in a Renaissance style by Sir Aston Webb, which were opened in 1909, ... (p. 280)

というわけで、漱石の留学中はまだ工事が進行中だったということになる。その展示内容については、

[It] was founded as a museum of decorative and applied art, mainly for the instruction of craftsmen and students. ...The collection of applied art, both in value and extent, is one of the finest in the world,... (p. 281)

とあって以下20ページにもわたってその各階各室の展示物を解説しているが、1900—02年当時どこまで完成していたかわからない。漱石は土井晚翠や藤代頼輔をここに伴い、少なくとも3回は見学している。現在の『ブルー・ガイド』には、'repeated visits are necessary to do justice to its store of treasures' とあるが、漱石推薦の見学場所の一つだったようだ。現在では周辺の3博物館とあわせて the South Kensington Museums と総称されている。

もうひとつ、漱石がテムズ南岸に引っ越してから訪ねた美術館に South London (Fine) Art Gallery というのがある。これは漱石の下宿よりも Camberwell New Road を奥へ入ったところに2年前に開校した Camberwell School of Arts and Crafts に隣接していた。



Carlyle's House

Parsons, Frampton, Waterlow, Val. Prinsep, etc.
(p. 379)

と『ベデカ』にはあるが、今のガイド・ブックを見ると 'a small collection of paintings... may usually be seen on request.' とあるだけである。

あとロンドンの有名美術館としては6月に公開されたばかりの Wallace Collection がある。これはペイカー街を東へ入ってすぐだから、クレイグ先生の帰りに漱石も訪れたにちがいない。

このほかには、市中のどこからでも見える St. Paul's Cathedral (11月 17日) を訪れ、Hyde Park (11月 6日、以後たびたび)、Hampstead Heath (11月 23日長尾半平と)、翌年 3 月 Kew Gardens (公式名を The Royal Botanic Gardens という植物園、田中孝太郎と)、それに Regent's Park の一角にある動物園も訪れたかもしれない (漱石文庫の中に *Guide to the Gardens of the Zoological Society of London, 1900* がある)。ロンドン見物もこのあたりでそろそろ終わりである。

21. カーライルの旧居

これはもう名所見物の域をこえて、ロンドン文学散歩ということになるが、34年の8月3日、池田菊苗と24 Cheyne Row, Chelsea, S. W. の Carlyle's House を訪れている。(Cheyne は 'some say [tʃéini] and others [tʃein].' とジョーンズの発音辞典にある。) ここは、1881年にカーライルが亡くなったのち、1895年から一般公開

[It] contains collections of paintings, water-colours, engravings, and sculpture, and a technical museum illustrating the history of British industrial art. Amongst the artists represented in the permanent collection are Hogarth, F. Madox Brown, G. F. Watts, Ruskin, Sidney Cooper,

されるようになった。それより前1890年にすでに新渡戸稻造がここを訪ねているが「まだガラスでも破れたままで少しも構ってなかった」。漱石は訪問者名簿に署名を求められて、前の方を見ると日本人は一人もいない。「して見ると日本人でここへ来たのは余が始めてだなと下らぬ事が嬉しく感」じられたと、「カーライル博物館」に書いているが、よく調べてみると、すでに前の年の11月19日の頃に、オックスフォード留学中の日本人の署名があるので、漱石は半年ほどちがいで栄冠(?)を逸したわけだ。それに漱石が「なるべく丁寧に書」いたという署名も、実は同行の池田の筆跡らしく、住所も池田と同じにしてある。しかも「四たびこの家に入り四たびこの名簿に余が名を記録した覚えがある」とあるのに、最初の1回分しか見つからないのだという。(以上、角野喜六「カーライル博物館と漱石の署名」『朝日新聞』、昭和52年12月23日付夕刊による。)

もうひとつ、去年亡くなった荒正人氏編の『漱石研究年表』の初版 196 ページにこの博物館の写真が出ているが、これがなんとディケンズの Old Curiosity Shop の写真なのだ。どうしてこんな手違いがおこったのかといふと、前回にも引用した伊知地純正著『倫敦名所図会』の94、95ページに上の 2 つの写真が向かい合わせに出ているものだから印刷所で取り違えたのではないか、というのが中林良雄氏の推理である。というわけで、ここにその正しい方をお目にかける。丁度真ん中の家がそれである。このほか、近くにあるジョージ・エリオットや D. G. ロセッティの旧居も見たが、「これらは皆すでに代がかわって、現に人が入っているから見物は出来」なかつた。(「カーライル博物館」) (玉川大学助教授)

(p. 31 よりつづく)

わが国の学校文法には、今なお、ことばの現実とかけ離れた不自然な英語が見られるように思われる。その改善は急務であるが、臆断によつては、もちろん、事態は少しも改められないであろう。それぞれの問題点について、現代英語の実態を調査してみることがどうしても必要なのである。疑問の点について、確信を得るために、調査の規模ができるだけ大きくしなければならないであろう。得られた用例の数が少ない場合には、偶然性が入りこむ危険があるからである。(茨城大学教授)

*

*

*

感嘆文の現実と学校文法

外山敏雄

(1)

わが国の学校文法では、まず、
What a beautiful rose this is!
How beautiful this rose is!

のような、「be」動詞を用いる感嘆文をとりあげて教え、それから一般動詞の感嘆文へと進む。

感嘆文は、本来、対象となる事物にたいするある感情の高まりが（急に）起り、それが口をついて出る発話であろう。そうであるとすれば、上のような文の主語+be動詞は不要なのではないか。必要というよりは、それを伴うことは、かえって不自然なことなのではないか。こうした疑問が長く筆者の頭から離れなかったのである。

このような場合に主語+be動詞という構成要素（this is, this rose is）が加わるためには、センテンス全体の構成を見わたした、冷静な判断が同時にはたらかなくてはならないであろう。こうした場合の感情の高まりは、はたして、それだけの“ゆとり”を伴うであろうか。感情の高まりと冷静な判断という互いに相容れない精神活動が同時に（瞬間に）1人の人間の心の中で起りうるであろうか。

(2)

はたしてことばの現実はどうであろうか。ことばの現実は、われわれが判断をくだす際の何よりも確かなより所を与えてくれるはずである。それゆえ、いま筆者の手許にある現代英語で書かれた出版物を少しえらんで簡単な調査をしてみることにする。片よらない文体のものを選ぶことにして、下記のものをとりあげてみる。それらを全ページにわたり調べすべての感嘆文を抜き出してみることにする（ただし、③については、広告文は対象から除く）。

- ① Carnegie, Dale: *How to Win Friends and Influence People* (1937) (Seibido ed.)
- ② Marckwardt, Albert H. & Quirk, Randolph: *A Common Language* (1964) (Kenkyusha ed.)

③ *The Reader's Digest* (U.S. Edition): Jul. '78, Aug. '78, Sept. 78, Oct. '78, Nov. '78, Dec. '78.

* * *

さて、早速であるが、調査の結果えられた感嘆文の用例は全部で15例であった。以下、えられた用例を I What型 II How型にわけてあげてみたい。なお、各用例には最小限必要と思われる前後の文を加えておく。

I What型

(A) 主語・動詞なし

1. After he left, I spoke of him with enthusiasm.
What a man! And how tremendously interested in boats!.....*How to Win*.
2. What a shame! I always thought this had something to do with a kitten going across a square.*A Common Language*.
3. And so I met Eileen and Henry Ward. They would not hear of my pushing on for at least a week. What generous, warm people!.....*Reader's Digest*, Nov. '78.
4. Backstage a woman shouted: "Oh, Lord!" The curtains closed. One of my children chuckled evilly, "Jeez*, whatta buncha losers**!".....*Reader's Digest*, Oct '78.
5. What a color! Jules Verne described this "liquid jade" perfectly in 1882 as "a wondrous shade of green no artist can achieve on his palette, a shade nature has never matched in the hues of vegetation or in the color of the most limpid seas."*Reader's Digest*, Sept. '78.
6. He gazes across the bright-green turf of Dodger Stadium and observes, "Isn't this a wonderful ballpark? What a great way to spend an eve-

* (<Jesus)

** (=what a bunch of losers)

ning!"*Reader's Digest*, Sept. '78.

7. Bruce now has a healthy sense of self-esteem. But there is more to his story. Each time during his comeback when a flood of doubt would threaten, his wife, Claire, was there to remind him of his previous successes. She let him know that she would welcome going back to work. She showed him that she loved him. Without her, Bruce might have gone under. With her, he made it. Self-esteem—what a wonderful gift!*Reader's Digest*, Aug. '78.
8. "What a place to spend New Year's Eve!" 16-year-old Matt Meacham shouted as he plunged into a 10-foot snowdrift.....*Reader's Digest*, Aug. '78.

(B) 主語・動詞あり

1. When the natal day arrives, there is my letter or telegram. What a hit it makes!*How to Win*.
2. What a vision of agony and terror Muck evokes! Stupendous earthquakes rocked Atlantis, toppling homes and temples into rubble.*Reader's Digest*, Aug. '78.
3. Each sleeping bag was large enough for one body. No more. Betty couldn't keep me warm, nor I her. We stared at each other. What had we gone and done! We laughed, donned extra sweaters and socks, then struggled into our long, narrow nests.*Reader's Digest*, Aug. '78.

II How型

(A) 主語・動詞なし

1. After he left, I spoke of him with enthusiasm. What a man! And how tremendously interested in boats!*How to Win*.
2. How dare anyone sleep on such a glorious morning! How decadent to stay in bed—unless one is dangerously ill!*Reader's Digest*, Dec. '78.

(B) 主語・動詞あり

1. He had had little education, and how he loved a scrap!*How to Win*.
2. Oh, how my spirits soar! At last, glinting on the far side of the dunes, I see it: the Indian Ocean, end of trail.*Reader's Digest*, Nov. '78

以上が得られたすべての用例である。What型についても、How型についても、主語・動詞をもつのは一般動詞の文に限られている。

(3)

たしかに、How tall that man is! は What a tall man! ですんでしまい How beautiful this rose is! は What a beautiful rose! あるいは単に How beautiful! でよいはずである。こうした発話は、対象に目を向けながら発せられるであろうし、抽象的観念が対象となる場合には、上の用例のように、situation や context が対象となる事柄をはっきりさせるはずである。

このような場合に主語・'be' 動詞を加えることは、初めに考えたように、むしろ、感情の高まりをストレートに 'exclaim' することとは異質な要素、そのこととは本来相容れない要素をつけ加えることになると思われる。余分なものをつけ加える "ゆとり" もないはずである。また、方向を少し変えて考えてみると、こうした場合に、不必要的ものをつけ加えれば、感情の高まりを伝える力はそれだけ減殺されるように思われる。短く切りつめるほど訴える力は強くなるはずである。

発話が必要最小限のかたちとなって現われるのは自然のなりゆきなのであって、それを単純に "省略" などとすることが当を得た説明とならないことは言うまでもないことであろう。

さて、主語・一般動詞をもつ5つの用例については、では、どのように考えられるであろうか。これらの感嘆文は構造的には、

What型: What (+N) +S+V!
[O]

How型: How +S+V (+O)!
[Adv]

となっていることがわかる。文頭の What (+N), How がそれぞれ object, adverbial として不可分のかたちで V と結合しているのである。したがって、これらの場合には動詞（当然主語も）を欠いては文が成立しないわけである。主語・動詞も最小限の要素として必要となるのである。

主語・動詞をもたない感嘆文と主語・動詞をもつ感嘆文とは、それぞれ固有の領域をもち互いに代替することのできないむしろ別個のものであることがわかる。

(4)

本稿ではこれまで筆者の頭から離れなかった1つの問題の解決に近づくためさきやかな調査を試みた。一応の判断を下せるだけのデータは得られたように思われる。

(p. 29 へつづく)

John Doe と Simon Legree

よく使われる人名のいくつか（その3）

矢野文雄

John Doe

When Ellery blew the flame out, Wallace smiled again. But immediately Ellery said, "How did you come to take the name Alfred Wallace if you remembered nothing about your past? Or did you remember that?"

"No, it's just a name I plucked out of the ether, Mr. Queen. 'Alfred', 'Wallace'—they're very ordinary names and more satisfying than **John Doe**. Lieutenant Keats, aren't you going to check my story?"

これは Ellery Queen の *The Origin of Evil* (1951年) に出ていたものである。全く過去を思い出せない男が、Alfred Wallace と名乗っている理由の一つとして John Doe よりはましな名前であることを挙げている。

ここで John Doe という名前が出てくるのは、これが氏名不明の男につけられる仮想名として最もポピュラなものだからである。名無しの死体は John Doe と呼ばれるのが普通だ。次に一例を挙げてみよう。

The reporter took a deep drag from her cigarette, blew the smoke in a featherly stream at the ceiling. "My editor has a theory," she told him finally. "He has a theory that maybe the **John Doe** in the morgue isn't just a **John Doe**. And maybe the woman he killed wasn't just a soiled young Willow. Interesting, huh?"

(*Time to Prey* by Frank Kane, 1960)

Webster's Third New International Dictionary には次のような説明が出ている。

john doe 1: a party to legal proceedings whose true name is unknown; esp: the first such party

when two or more are unknown 2: an anonymous, undistinguished, or average man

同辞書ではさらに本名が不明の当事者が何人かいた場合、1番目を John Doe, 2番目を Richard Roe, 3番目を John Stiles, 4番目を Richard Miles と呼ぶように説明されている。が、*Dictionary of Word and Phrase Origins* を始めとして、John Doe は原告の仮想名として、Richard Roe は被告の仮想名として用いられるのが普通だとしている。それはともかく、legal proceedings の関連で使われた例を 2つ示そう。

The heister was about twenty-two, middle-sized, dark and hairy. He stood there staring at them moodily, hands cuffed in front of him.

"There's no I.D. on him. He wouldn't give a name."

"We can always book him as **John Doe**."

"My name's Lopez," said the heister sullenly.

(*Cold Trail* by Dell Shannon, 1978)

He rose resolutely, and going to the telephone, called up Heath.

"Sergeant," he ordered, "get a **John-Doe** warrant and meet me immediately at the Stuyvesant Club. Bring a man with you—there's an arrest to be made."

(*The "Canary" Murder Case* by S.S. Van Dine, 1927)

法律上の手続きでは必ず当事者の名前が必要であり、名前のところをブランクにしておくことは出来ない。そんな時に John Doe が便利というわけである。

名前は分かっているが、他人に聞かれては困るような場合に John Doe で代用することができる。

Healy came on. I said, "This is Spenser. I got a suspect on the Bartlett kidnapping, or whatever."

Healy said, "Or whatever."

"And I want to put a lid on him for the afternoon so I can find the kid."

Healy said, "What's his name?"

"**John Doe**."

"Oh," Healy said. "Him."

(*God Save the Child* by Robert B. Parker, 1974)

Spenser は Dr. Croft を警察に留め置いてくれるように頼んでいるのだが、彼の名前を言わない。彼の診察室

から電話しているので、周囲の者に知られてしまう危険があるからである。また、John Doe が「ありきたりの男」の意味で使われる場合がある。

Rutledge turned a fresh page in his notebook. "John Whitlow. Old Thompson. Travis Walker. Well, I know Travis Walker. I mean I know who he is. Look, Morris. We have the makings of a simple suicide." Rutledge sipped his coffee. "If Rossi had been John Doe, we wouldn't be here. But start from the first time you saw him today. Tell me everything that happened, and we'll wrap this thing up. (*Follow the Leader* by John Logue, 1979)

ここでは、ホテルから墜落死した男が元名ゴルファーのテレビ解説者なので、念には念を入れる意味で殺人謀の者が来たと説明しているところ。もし、ロッキーが世間に知られていないごく普通の男だったら、とっくに自殺として処理されてしまっている、と言っている。

ところで、John が男の名前だから John Doe は当然男の場合にしか使えない。女の場合には Jane Doe が使われる所以である。

"Nick's down in R. and I. with that pharmacist looking at mug-shots." The pharmacist had got robbed on Saturday night, knocked around a little when he put up a fight.

"No bets he'll pick one." Mendoza went on into his office and sat down at the desk, picked up the report centered on the blotter. It was an autopsy report on a Jane Doe, found last Thursday afternoon in Pershing Square, D. O. A.

(*Cold Trail* by Dell Shannon, 1978)

ここでは身元不明の女の死体について使われているが、次の例では名前を伏せておいて欲しいと頼んでいる。

"Meanwhile, can I offer an invitation? We're holding a mammoth cocktail party at the Savoy on Monday. The Press is invited to meet Dilly, United's newest—and we hope greatest—star."

"Hardly in my line, Mr. Spinnaker."

"Well, you might find it intriguing. We'd like to have you."

"Mebbe. We'll see. If I come the condition is as Jane Doe; I want no publicity on this occasion. (*The Dear, Dead Girls* by Nigel Morland, 1961)

Simon Legree

"But what about your father and mother?" Honey asked. "Won't they worry about you?"

"I haven't any family except Uncle James," the boy told her in a still more sullen voice. "I've got a stepfather, if you can call him that. I call him Simon Legree, myself. And if he finds out where I am, hell drag me back to his farm and beat me and make me slave from morning till night without pay."

これは13歳の少女探偵 Trixie Belden のデビュー作である *The Secret of the Mansion* (1948年) からの引用である。すぐあとに説明があるので、何故まま父を Simon Legree と呼ぶか、Simon Legree とはどんな人間か見当がつけられよう。

この Simon Legree は Mrs. Stowe の有名な小説 *Uncle Tom's Cabin* に出てくる残酷無慈悲な奴隸商人の名前で、13歳の女の子が知っているのも当然であろう。

Webster's Third New International Dictionary には [after Simon Legree, cruel slave dealer in *Uncle Tom's Cabin* (1852), novel by Harriet Beecher Stowe †1896, Am. author] : a cruel taskmaster と説明されている。Simon Legree のように残酷で無慈悲な者や、親方や主人など厳しい仕事を割り当てる人について使われることになる。

次の例では弁護士のペリー・メイスンが秘書のデラ・ストリートを Simon Legree と呼んでいる。メイスンは手紙が嫌いで、机のファイルには未返事の手紙がたまっていて、いつもデラにやいのやいのと責められている。今日も月曜恒例のやりとりとなって……

"The telephone poles are all the same size. However, as you get farther distant from them they appear to be smaller, and....." He broke off abruptly and said, "Wait a minute. You aren't gently trying to point out a fallacy in my argument, are you?"

At her triumphant grin, he made a mock grimace. "I should have known better than to argue with a woman. All right, Simon Legree, get your notebook ready, and we'll write those confounded letters." (*The Case of the Perjured Parrot* by Erle Stanley Gardner, 1939) (英語／ミステリー研究家)

アメリカン・フォークロア

(4)

—ユーモア語 1825年～1855年—

倉田（ダイケストラ）好子

スピリット誌もブレード誌も、もっぱら各分野の才気ある通信者の寄稿に頼っていた。彼らはお互いのニュース交換から“良いもの”を再版していたが、それでも他誌に比べてこの2誌はずーっと独創的なユーモア作品を扱っていた。W.T. PorterもM.Mathewsも、辺境地に住みついて、行商人や居住者達を通常観ている弁護士、医者、編集者やその他東部からの教養ある人々との交流を密接にはかっていた。スピリット誌の多くの才覚ある通信者達は、古い西南部に住みつき、ブレード誌の方は、ニューイングランド地方に集中していたが、しかし、この2誌は、全国的な物をも取り扱い、広く全米に回覧されていた。両誌は互いに競い発展して行った。彼らの独特の文体は、地方人物のユーモアあふれるスケッチに適していた。その軽い会話体の雰囲気は、沼地の土食人や、ヤンキー國の未熟者達についての話等を交換する機知あふれる友がらのサークルに、多くの読者を引き入れて行った。通信者達は、しばしば自分達の目で実際に見たことを紹介して来、登場人物には、彼らの土着の方言を話させた。ブレードやスピリット誌に出ているスケッチには、イタリック体で書かれた会話が多く、そこには口語体を強調するために、より自由な言い廻しや、その土地独特の慣用句等が盛り込まれていた。2誌ともまた、陽気なスピリット（訳註：氣）とするどいブレード（訳註：力または草の葉を意味するがここでは皮肉や辛辣さを表わしている。）を解する内輪の読者を意識していて、書かれたウイシクとも言うべき、お気に入りの言い廻しを引用符を用いてひんぱんに使い、茶目っ氣とか、いたずらっぽさ、諧謔を取り入れようとしている。

寄稿者達はスケッチの材料を多く口語りの話から見つけて来ており、それはまさに、印刷されたはなしを読むことを意図していた。観察された事件、創作された嘶

や、あっちこっちで見られる民話の類も、同様な型とスタイルで書かれているので注意を要するが、それでも、フォークロアリスト達は、スピリットやブレード誌に載せられている何千という話の中に、かなり多くの古い話を見出すことが出来る。このような家庭的な週刊誌に出てる民話は、普通、日刊誌のものより、背景や、言葉の点においてより本物らしく、また詳しくのべられている。というのは、物語りの全背景、環境というものが打ち出されていて、話は相応に適した枠の中で提供されているからである。

時には、口承のユーモアが直接レポートされたという証拠が非常にあきらかな場合もある。1847年、4月24日にスピリット誌は、「乱暴な話、または、アンクル・チャールズの想い出」と題したブレード誌からのものを出している。そのスケッチは、メイン州のオーガスタ近辺の小さい町から来た嘘つきの名人に関するものなのだが、彼は、「まさにまさに徹底した語り手であり……他の語り手、Major Longlow, Sam Hyde やドイツのフォーク・ヒーローである Münchhausen 等も足元に及ばない程だった。」長短それぞれ2個ずつの話が載っているのだが、それらは、切られた蛇が直ぐ元に戻る話や、つまり木の上でぱーっと開く太った雌鳥の話とか、主人公の河底旅行等、お馴染の法螺話である。1851年10月25日、ブレード誌はまた、通信者がマーサのぶどう畑の森の洞窟向け出帆する船長たちによって、あるホテルの囲炉裏ばたで語られた陽気な「冒険談」を載せている。一船長、ベンソンは、彼の手を犬ののどに突込んで、体の内側から犬の尻尾をつかみ、犬を裏返しにしてしまった話や、セント・ポール寺院の塔に登るねずみの足音を街路上に聞いたという法螺話の類も載せてている。

スピリットやブレード誌では、やくざ者や狡猾者に関するアメリカの民話の多くを、実際にあった事として載せている。「ビッグ・リッグが酒を得た話」は、スピリット誌に、1850年7月27日に、ミシシッピー州、グリーンビルのロビン・ロー・ヘッドからの原作寄稿として出版されている。ビッグ・リッグ・シャタックは、ミシシッピー河を他の船乗りと一緒に、平たい大型の荷物船を漕いで下る船員の一人だった。ある時、その船長が、ウイスキー樽が空なのを見て、樽の半分を河水でうめて、後の半分をこの次に寄る荷揚場でウイスキーを買ってうめるように言いつけた。（通常その樽が一杯の時は、ウイスキー6ガロンとミシシッピーの河水、茶さじ2杯分位が入っていたのだが。）そこで荷揚場に着くや、リッグは陸に上り、ウイスキーを注文し、樽に入れさせた。しかし、彼に現金が無いと知るや、その酒屋は、リッグに樽

から酒を注ぎ出させた。しかしその樽に残った3ガロン中には、その後の旅中、船長並びに船員一同を楽しませるに充分な水割りウイスキーが入っていたという。

この多彩なスケッチは、土地土地のよた者やならず者等と関連して、全国的に聞かれるアメリカの狡猾話である。この種の話を短く変形したものが、1845年にスピリット誌から出されているが、それは、ビルという「乱暴者」について、セント・ルイス・レベイユ誌が出したものから採っている。1860年にニューヨーク・アトラス誌では、この話の詐欺師をラコニアの將軍テエイに帰して載せており、1902年に出た西マサチューセッツの地方誌、ザ・パークシャー・ヒルズでは、エリシア・スマート大佐に帰して載せられている。ヴァーモントのヴァージェンスの靴屋で実際に語られた話に基づいて『アンクル・リシャの店 (Uncle Lisha's Shop)』という本を書いた(1887年) 盲目のヴァーモントの作家, Rowland Robinson は、前述の詐欺師の話を、彼の話の中に出て来るグリーン・マウンテンという語り手たちの一人、サム・ラベルの口から話させている。20世紀の作家であり、ニューハンプシャーの伝承の採集者である Cornelius Weygandt は、この詐欺のトリックを、ザ・ホワイト・ヒルズ (1934年) とニューハンプシャー・ネーバー(1937年) の中で2回使い、前者ではサンドイッチのアンクル・サム、後者では、テオフィリュスという双子にべてんを行わせている。最後に、ニューヨーク州からの民間伝承の収集、Harold W. Thompson (1940年) の *Body, Boots and Britches* という本の中でも同様に、いかだの英雄“ボニー”クイランがどのようにしてクレジット無しでラム酒を手に入れたかを述べている。

このようにべてんは河を下り、山をさまよっているうちに、次第にそのわるさに光沢を増して行った。その型には2種類あって、一つは、ならず者が前もって彼の酒つぼに水を半分入れて置く手と、もう一つは、水の入ったびんをかくし持ち、酒びんとこっそりとりかえて酒びんの持主に水のびんを返すという手口である。この場合、あつかう酒にはラム酒からブランデー、ウイスキーにジンと色々種類があるが、のどがかわいている方(べてんにかける方)は常に文なしのクレジット無しである。この味のあるアメリカの民話は、スピリットやブレード誌のひょうきんな通信者達によってみがかれ、愛されて行った。

ペーパーバック本——最上の新聞のスケッチの多くは、ファイルから集められ、安いペーパーバックや布製表紙の本に再印刷された。フィラデルフィアの2出版社ケリー・アンド・ハートと、ティービー・ピーターソン

・アンド・プラザーズは1840年から50年代にかけて「アメリカ・ユーモア作品の双書 (Library of Humorous American Works)」を出したが、それは、スピリット誌からの選ばれた話を数巻にわたって含めており、2巻はポーター自身が編集にあたった。1930年に文学者によって再発見された「古い西南部のユーモア」は1835年、ロングストリートの「ジョージア・シーン」にはじまって、1867年、ハリスの「サット・ロヴングッドの話」に至る新聞からのスケッチの再版を参照している。

フォークロアの要素はこの種の文学によって方々へ散って行ったが、特に1巻は、口伝承に依っていることを明らかにしている。「漁夫の河 (ノース・カロライナ) 実況と人物」は、1859年に Harden E. Taliaferro によって書かれたものであるが(これは、はじめは、新聞に出なかったが「ジョージア・シーンズ」とは張り合っていたのだが) この作品は、民話採集者のレポートの模範の型を提供している。背景は、ブルーヒルズのサリー郡の山間地、その構成は、各語り手による話を引用して、土くさい人物描写のシリーズであり、その話は、しばしば良く知られているタイプに属する。長い話や挿話の貯えの多い鉄砲鍛冶のアンクル・デービー・レーンの話は、桃の木を背負った鹿や、教会の塔をかついだ馬等の古典的なミンチヨーセン式のテーマと、ガラガラ蛇やたが蛇等の怨ろしい植民地からのレポートを混ぜている。サリー郡で育った、バプティスト派の牧師、タリアフェロが、彼の育った山間地の民話を語るのに使った言葉は、土地の人々の気風の良い話し方やその土地に伝わる昔からの言いまわし等を忠実に捕えている。例えば、その典型的なものは、「俺が死のうと生きようとしわくちゃのりんご程も気にしていない」、「ター河程長い列の山猫共を、ひっぱたいてやりたい氣になった」とか、「きつつきのつむじ風のようにすっ飛んで行った」等である。山間の地に住む人々の自分達の言葉に対する忠義心は、上品な言葉を使っていた奴れいを捕まえた *Uncle Frost Snow* のスケッチに激しくあらわれている。

「『パンタロン、パンタロン等と、一体お前はどこでこんな言葉を覚えたんだ? お前の主人を出し抜こうとしてか、フランクリンや他のお偉いお方々の話し振りなんぞ真似しゃがって、この長あごの猫の糞奴が! お前の主人は、そんな物はブリッヂスとしか呼ばないんだってことをよく覚えて置け。上品ぶった言葉の吐き方位はこのわしでも教えてやれるわい。この厄介者奴が!』と言つてわしは、そいつをこっぴどくひっぱたいてやったんだ」(訳註: ずほんの意味でパンタロンはフランス語で上流 (p. 6 へつづく)

これからのインディアン教育

山 本 昭
山 本 吉見子

(今まで10稿にわたって現代のアメリカ・インディアンについて述べて来たのであるが、この稿でまとめてみたいと思う。社会構造や、家族構造、インディアン部落での実生活等、述べたい事、日本の読者にぜひ知つてもらいたい実情等々話題は尽きない。機会があれば別稿で述べたいと思う。)

これまで連載した稿では特にインディアンの教育を中心にして述べてみたが、アメリカ一般の教育状態から観ると、まだまだ未開発の分野である。しかし、インディアンの教育者の間には、従来の自分の部族だけという島国根性から抜け出し、一般インディアン教育発展を志し、献身的な活動ぶりを示す人々が出て来ている。本誌69号に述べたルシル・ワタホミジー夫人もこのような教育者の一人で、夫人を中心に1978年の夏から今夏まで3回にわたり、南西部インディアン言語教育に携わるインディアン教師のための言語教育講座が開かれて来たのは、特筆すべき事である。これは4週間にわたり応用言語学と言語教育についての集中講座で、朝の8時半から午後3時半まで、びっしりと予定が組まれていた。昨年と今年の2回は筆者(昭)も応用言語学主任として参加し、貴重な経験を得た。この連載最後の稿で、ネイティブ・アメ

リカン教育の現段階的一面として、講座での成果と筆者の経験の2,3とを、読者の方々と分かち合いたいと思う。

昨年に引き続き今年の講座にも、20歳から89歳という年齢の幅のある参加者があった。今夏の参加者の平均年齢は60歳であったろうか。自分達の部族の若い世代に、先祖伝来の言語・文化を書き言葉にして残してやりたい、文字文化を残してやりたいという熱望の下にやって来た人々の熱心さと意欲には、何といっても先ず頭が下がる。この50数名の参加者の学歴を見ると、大学出身者はごく数名、現在大学の夜間講座等で単位修得中が、比較的多數であった。この夏期講座はカリフォルニア・サンディエゴ州立大学と提携して開かれているので、この大学の単位として組み込まれている。50代以上の参加者(全体の半数以上)は小学校教育も完了していない人々が多かったが、特に小学校出の最高年齢の89歳になるマリコバ族の老婦人は、“Learning can start at any age, can't it?”(学問に年齢はないのですね)と述べ、若い人々を大いに鼓舞したものである。

参加者の言語分布は、ユーマン語族(Yuman)とユト・アツテカン語族(Uto-Aztecian)の2つからなり、前者はワラパイ、ヤバパイ、モハペ、マリコバ、ココバの

5言語からなり、後者はピマ語とパパゴ語に代表されていた。この内、ワラパイ語、ピマ語、パパゴ語は、数年前から二重言語教育の一端として、話し言葉、書き言葉がよく使われて来ているが、その他の言語の書き言葉教育は、アルファベットが出来て1年ないしはそれ以下という状態であった。従って夏期講座の第1週目は、言語学入門と書き言葉導入に専念し、特講に次ぐ特講であったが、マリコバ族の平均年齢65歳の人々は夜の10時まで熱心に勉強していた。

この勉強にも環境がかなり込み入ったものがあった。それは参加者の大多数が女性であり(男性は3名だけ)また母親であったため、子供連れが多くいたこと、(多い人は幼児から10歳位までの4人の子供連れ)殆ど全員が寮生活をし、教室も同じ寮内のラウンジを



ルシル・ワタホミジー夫人と娘さん(ピクニック)

利用したため、授業中常に数人の子供が徘徊していたこと、寮が最寄りの銀行・店から数マイル離れていた上に、車で来ていた参加者が少なくて食料等の買物に時間がかかった等々の不便さと、その反面、殆ど全員の寮生活という点で、授業後の個人、またはグループの指導が比較的簡単であったという利点もあった。教員側は筆者と、助手として筆者の言語学専攻の学生2名（この人達は子供が母親の勉強の邪魔をしないように、よく鼻をかんでやったり、手洗いに連れて行ったりするエクストラの仕事まで引き受けた）、後半の2週間、サン・ディエゴ大学とUCLAの言語学科の学生が2名補佐として加わった以外は、全員がインディアンであった。

午前中はユーマン系言語族は筆者、ニュート・アツテカンの方はババゴ族出身の言語学者オフィリア・ザベタ女史が分担して応用言語学集中講義をした。これで老人より若い人達の方が音をあげたようである。午後は午前中の講義を基に実地に使える教材の作成に費やした。例えばアルファベットの本、数の本、色の名前の本、ゲーム類等である。2週間目からは更に各々の文字を実際に使っての言語分析と、創作文の教育に重点を置いた。2週間目の第1日に筆者が全員を対象に物語と詩の書き方について講義をし、4週目の講座の終りには、ユーマン語族、ニュート・アツテカン語族それぞれ30ページからなる各言語で書かれた初めての詩集を編纂した。後でその2、3をあげる。

詩の入門として筆者が利用したのは俳句であった。言葉を冗長にせず、しかも文法に則ったものを創り出すのに、俳句が例として適當と考えたからである。ネイティブ・アメリカンの有名な詩人、サイモン・オーティーズ氏を4週間目に招いて、詩と物語の創作ワークショップを開いたのであるが、その時学生達の、怨らしく生まれて初めて創ったものが素晴らしいとオーティーズ氏が嘆じたのには、創作者達も笑みくずれ、筆者も功が報いられた思いでうれしかった。

この夏期講座が産み出したものの一つとして物語を紹介しよう。これはワラパイ族出身のジョージン・ベンダー娘が伝説を基にしてワラパイ語で書いたものである。この物語はカヨーテ物語の一つで、普通は夏は語られないものである。人の口からカヨーテ物語が話されると、大変な不幸が訪れる信じられているからである。

「昔々、色々な動物達が住んでいました。カヨーテや、兎や、鹿や、熊等、色々な動物が寄り集まってはお祭りをして踊ったり、歌ったり、食べたりして楽しくさわいでいました。しかし動物達の中で蛙だけはお祭りに加わ



ワラパイ族の子供たち

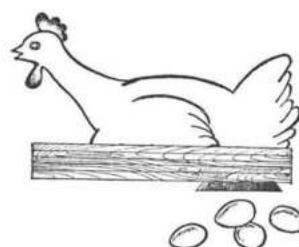
らず1人でぽつんとしていました。蛙は何かぶつぶつ言っていました。動物達の中の1匹がこっそりと蛙の所へ近寄って、蛙が一体何をしているのか覗いて見ました。それから皆の所へ帰ると、皆と一緒にになって『わーい、わーい、馬鹿蛙』と悪口を言いました。すると蛙がこう言いました。『そんなに私をからかってばかりいると、今にとんでもない悪い事がおこるぞ』と。これを聞いたカヨーテが言いました。『お前のようなちっぽけな奴に何が出来る。馬鹿な奴だ。』そういって皆と一緒にになって蛙の上にとび乗ると、ペシャンコに蛙を踏みつぶしてしまいました。すると大洪水が起こって、皆を飲み込んで洗い流してしまったのです。こっぽし。」

カヨーテはネイティブ・アメリカンの物語の中でよく主役になるが、概して悪い事をすることが多い。この物語は表紙に『冬の物語』と銘打ってまとめられ、教材の1つに加えられ、この話しを基にして双六道中のようなゲームも考案された。ゲームでは賽の目の数がカヨーテの絵の所に当たると、駒を後もどりさせなければいけない仕組みになっている。この物語以外にも十いくつかの物語が出来、各々さし絵をつけた立派な教材として参加者が持ち帰った。次に詩を載せて置く。これには日本語訳をわざとつけないで置くが、元のインディアン語の表現の簡潔でしかも感覚が鋭いのと、英語訳の説明的な表現とに注意していただきたい。詩は全部、最初からインディアン語で考えられ書かれたものである。

1. 太った小さな馬

原文 Olo qech say
Galulk gwalsey
U:k jigwadk bay
Dagwivk jamjik bey. ...Hualapai Group

分析	Olo qech say (horse little fat) Galul-k gwal-sey (round-k blood-brown) U:-k jigwad-k bay (see-k laugh-k all) Dagwiv-k jam-ji-k bey (chase=pl-k miss-pl-k oh=my)	Mad-nyuv-wew-jo (land-Sub-live-pl=Def) U:-k ba sidav-yu (see-k them I=be=proud-Aux)
英訳	Little horse fat, round and rusty brown, When people see it, They all laugh, They chase it, But they miss it. Oh Dear!	Of those people who lived here long ago, Of those people who went through here, I am proud. Of those things that the people did long ago, Of those things that people ate, Of those places that they roamed, Of those places that they lived, When I see those remains of people and places, I am proud
	2. Waksigwich (カウボーイ)	
原文	Ye:k davdam manka Olo va'ulka Waksi he:dka Waksi danyudka Nya gyu:vchyu? ...Philbert Watahomigie	1. ワラパイ語を使って英詩の伝統にそって実験的に創ったのであるが、上手に脚韻をふんでいる。(太った小さな馬)
分析	Ye:k-dav-da-m man-k-a (morning-very- Temp-DS get=up-SS-a) Olo va'ul-k-a (horse ride-SS-a) Waksi he:d-k-a (cow rope-SS-a) Waksi danyu:d-k-a (cow brand-SS-a) Nya gyu:-v-ch-yu? (I what-Dem-Subj-be)	2. 保留地での日常生活を唄ったものであるが、自己意識の目覚めが効果的に表わされている。(カウボーイ)
英訳	Very early I get up Horses I ride Cows I rope Cows I brand What am I?	3. 保留地内の古蹟を訪れるネイティブ・アメリカンの目には、歴史がさまざまと浮かび上がって来る。それが一つ一つ自分達現代インディアンにとって、インディアン意識を培う重要な要素となる。くり返しのフレーズが静かに、しかし力強くこの気持の過程を唄っている。(私の先祖)
	3. 私の先祖	インディアンによるインディアン教育が、これからも発展して行くことを願いつつこの稿をとじる。
原文	Gud bagovnu:wa Gov'wa:va ba sidavyu. Gud gweganyiwi:jo Gwenyima:jo Mad-nyivwa:vo Mad-nyuvwevjo U:k ba sidavyu. ...Josie Manakaja	(付記) この稿を書くに当たって ELEC『英語展望』編集部の御好意と御援助の絶大であったことに厚く感謝したい。
分析	Gud ba-gov-nu:w-a (long=ago man-who-live=pl=here-a) Gov'wa:v-a ba sidav-yu (those=who-came=through=here-a them I=be=proud-Aux) Gud gwe-ga-nyi-wi:-jo (long ago something-that-Sub-do-pl=Def) Gwe-nyi-ma:-jo (something-Sub-eat-pl=Def) Mad-nyiv'-wa:v-o (land-Sub-roam=pl-Def)	山本 昭 (カンザス大学人類言語学準教授) 山本 吉見子 (カンザス大学比較文学助教授)



三種の新教授法に対する一つの見方



ELEC 情報・資料の収集および分析研究グループ

田 中 春 美

すでに以前から *Workbook in Language Teaching* (1963) や *Adapting and Writing Language Lessons* (1971) で有名な Earl W. Stevick (米国の首府ワシントンにある外務省研修所勤務) は、最近「型にはまらない考え方」(unconventional ways of teaching) と呼ばれるようになった各種の新教授法の紹介や唱道に、異常なほどの熱意を示している。Silent Way の創始者 Caleb Gattegno の主著 *Teaching Foreign Languages in Schools: The Silent Way* (1972²) の書評 (*TESOL Quarterly* 8, 1974) と Community Language Learning (略して CLL) の創始者 Charles A. Curran 神父の主著 *Counseling-Learning: A Whole-Person Model for Education* (1972) の書評 (*Language Learning* 23, 1973) などを筆頭に、話題作 *Memory, Meaning, and Method* (1976) ——邦訳『新しい外国語教授法』(ブリタニカ出版, 1979) ——では、この二種の新教授法のほか、さらにいくつかのものを取り上げ、論評を加えている。

この Stevick が、前著 *Memory, Meaning, and Method* に対する読者の反応をきっかけとして、新たに三種の代表的新教授法、つまり再度 Silent Way, CLL, そしてブルガリアの医師 Georgi Lozanov を創始者とする Suggestopedia を詳細に紹介し、彼自身の解釈や評価を加えた著書 *Teaching Languages: A Way and Ways* (Newbury House Publishers, 1980) を上梓したのである。これは 300 頁を少し越える大著であり、外国語学習者と外国語教育に対する Stevick の見解を述べた第一部 (Part I), ついで Silent Way の紹介と報告から成る第二部 (Part II), CLL の紹介と報告から成る第三部 (Part III), Suggestopedia の紹介から成る第四部 (Part IV) が続き、最後に、以上の三種の方法に対する Stevick の見解と、Stephen D. Krashen の学習理論 (The Monitor Model) と Denise Levertov の発見 (The Levertov Machine) との対比、また、一見奇抜に思われるが、ロシアの大作家ドストエフスキイの名作『カラマ

ーザフの兄弟』(1879—1880) 中の劇詩『大審問官』とのかかわりでしめくくる第五部 (Part V) が並ぶ。いわば、三種の方法の解説が、Stevick 自身の考えでサンディッチのように挟みこまれている、という構成になっているわけである。

このサンディッチの外皮、つまりパンのほうが中味より重要なのか、それとも中味のほうがパンより重要なのかについては、立場により意見の分かれるところだが、筆者はあえてパンのほうを取り、特に第五部の第20章「三種の考え方に対する一人の教師の見解」と題された部分を中心として、この本の趣旨を紹介してみたい。もちろん、そのためには、三種の考え方になじんでおられない読者も少なくないはずなので、まずごく簡単にそれぞれの新教授法の概略を述べておこう。

まず、The Silent Way (沈黙式教授法) は、すでにいくつもの紹介論文が発表されており¹、わが国でもかなり知られるようになっている。創始者 Caleb Gattegno は、元来は数学学者であったが、数学教育と母国語教育 (つまり米国人に対する英語教育) の原理と方法を外国語教育へ応用し、目ざましい学習効果を上げてきた。著書 *Teaching Foreign Languages in Schools* (1963) は、最初あまり注目を浴びなかったが、その改訂版 (1972) が上記の Stevick の書評によって「磨かれざる真珠」と評価されて以来、外国語教育界でもしばしば話題になっている。これに気をよくして Gattegno は、第二作 *The Common Sense of Teaching Foreign Languages* (1976) を刊行した。考え方の特徴は、同じ発音を同じ色で示すその外国語の綴り字や基本語彙の表 (Fidel

1) 例えば、拙論「外国語教育はどこへ行く」『英語文学世界』(英潮社) 1975年 7月号, pp. 18—21, 24; 佐藤秀志「ハワイで受けた型破りの授業」『英語教育』(大修館書店) 1977年 12月号, pp. 79—80; 沢村文雄「The Silent Way」『語法研究と英語教育』(山口書店) 創刊号, 1979年 2月, pp. 87—93; 幸野稔「外国語教育の新しい潮流 "The Silent Way"」『秋田英語英文学』第20号, 1979年 2月, pp. 65—76など。

と呼ばれる)と、数種類に色分けされた数種類の長さの木の棒 (Cuisinaire rod と呼ばれる)を利用し、教師が原則として一回だけモデルの発音を示すだけで、あとは身ぶり手ぶりで学習者の発話を促進し、誤りの矯正さえ学習者どうしに任せる、というものである。Gattegno自身は、特定の指導手順を持ち、公開授業などではそれに従うものの、原則として教える手順は教師の創意にゆだねる、と明言している。

次に、Community Language Learning (集団言語学習法)、略して CLL も、すでにいくつかの紹介論文が発表されており²⁾、特に南山短期大学の Paul G. LaForge 神父の熱心な活動を通して、一部では相当よく知られている。創始者 Charles A. Curran 神父は、1978年7月に亡くなってしまったが、シカゴのロヨラ大学の心理学教授だった。専門のカウンセリングの原理と方法を、さまざまな学科の学習に適用し、その一つとして外国語学習を考えている。学習者の目的意識を高め、自発的学習に重きを置くところに特徴があり、教師の役割は、学習の五段階に応じて多少の違いはあるが、原則として補助的・誘導的であり、助言者・忠告者の域を出ないようにする。LaForge 神父は、日本人学習者に合うさまざまな方法を開発してきているが³⁾、創始者 Curran 神父の著書 *Counseling-Learning: A Whole-Person Model for Education* (1972) と *Counseling-Learning in Second Languages* (1976) に描かれている学習法を紹介すると、6~7人で一つのグループを作り、向かい合って円陣で坐る。目標の外国語を熟知したカウンセラーがその円の外側に控え、学習者の一人が母国語で会話の口火を切ると、そのうしろに回って、同じ意味の外国語の文を教える。その学習者は、それを仲間に向かって繰り返す。それに対する反応を、別の学習者が母国語で言うと、やはりカウンセラーがそのうしろに回って、外国語の対応文を教え、その学習者が繰り返す。要するに、通訳つきの会話のようなものだが、これを一区切り15分から20分として、テープ録音や黒板への転写で確認・復習し、学習時間の各人の印象を話し合う(反省)。このような学習を繰り返していくうちに、カウンセラーへの学習者の依存がしだいに弱まり、外国語の運用が熟達していく。

最後に、わが国で最も知られていない Suggestopedia (暗示的教授法)についてだが、東欧・ソ連・カナダなどではよく知られ、米国でも最近はよく話題になっているが、わが国ではまだ紹介論文さえごく少ない⁴⁾。創始者 Georgi Lozanov は、ブルガリアの医学者で、精神療法の分野でよく知られているらしいが、暗示と精神の集中によって言語学習の効果を大幅に高めることができる、

という点に着目し、そのためにはありとあらゆる手段を利用するのが特徴である。例えば、学習に先立って、あるいは学習と平行して、ヨガの運動を通して身体をほぐしたり、居心地のよい部屋で古典音楽を流したりするのである。さらに詳しい具体的な学習手順については、下記注4の解説のほか、Lozanov のよき理解者であるカナダのトロント大学の W. Jane Bancroft 女史の紹介論文 "The Lozanov Method and its American Adaptations" (*The Modern Language Journal* Vol. 62, No. 4, April 1978, pp. 167—175) や、米国アイオワ州の Iowa City にある暗示的学習の学会 (the Society for Suggestive-Accelerative Learning and Teaching) の機関誌 *The Journal of Suggestive-Accelerative Learning and Teaching* (略して SALT) —— 1976年より年2回刊行 —— 掲載の諸論文、そして Lozanov 自身の著書の英訳 *Suggestology and Outlines of Suggestopedy* (Gordon and Breach, New York, 1978)⁵⁾などを参照されたい。

Stevick がこれら三種の新教授法をどのように評価しているかを、彼自身のことばを通して知る前に、ごく形式的な面から彼の関心の比重がどのようなものか、調べてみるのも一興であろう。新著 *Teaching Languages: A Way and Ways* で、Part II つまり Silent Way に関する記述は4章(3~6)、48頁に及ぶのに対して、Part IIIつまり CLL に関する記述は11章(7~17)、約3倍の144頁に達している。しかし、Part IVつまり Suggestopedia に関しては2章(18~19)、わずか31頁でしかない。前著 *Memory, Meaning, and Method* では、Silent Way (第9章) と CLL (第8章) の比率は逆であり(13頁: 9頁)、Suggestopedia (第10章の一部) に至っては、3頁そこそこにすぎなかった。著者の関心の移行を示す事実として、興味深く思われる。もっとも、前著の

2) 例えば、拙論「恥ずかしさを捨てて好きなことを話そう——Curran と LaForge の外国語学習法」『英語教育』(大修館書店) 1977年2月号、pp. 40—43; 南比佐夫「Community Language Learning」『語法研究と英語教育』(山口書店) 創刊号、1979年2月、pp. 107—118; 石田雅近「Community Language Learning の妥当性とその限界」(その1)『英語展望』第68号、1980年1月、pp. 32—35; 同(その2)『英語展望』第70号、1980年4月、pp. 32—35など。

3) Paul G. LaForge, *Research Profiles with Community Language Learning* (Counseling-Learning Institutes, Apple River, Ill., 1975) 収載の諸論文などを参照されたい。

4) 片山嘉雄・篠田治夫編『英語科教育学』(ミネルヴァ書房、1979年)、pp. 58—59; 久泉鶴雄「The Suggestopædic Method」『英語教育』(大修館書店) 1980年3月号、p. 41および1980年4月号、p. 103ぐらいなものだろうか。

5) 新中国で英語を教えて Thomas Scovel によるかなり手厳しい書評が、*TESOL Quarterly* Vol. 13, No. 2, June 1979, pp. 255—266に載っているので、合わせて読まれるとよからう。

CLL の章の最後には、脱稿後 CLL についてさらに体験を重ね、まだまだ書くべきことが多いという付記があるので、新著での比重の移行は、ある程度予測されていたとも言えるが…

さて、それでは新著の第20章の内容に、話をしぶることにしよう。まず、前置きとして、取り上げた三種の新教授法が、第2章で挙げた語学教育に関する七つの一般原則に、完全にではないにせよ大部分、合致していることが確認される。つまり、その点では、三つとも遜色なしといふことである。次に、すでに最初に述べたような Part V の構成が示され、そのあとで、以下できるかぎり手短かに、三つの教え方に対する自分の見解を述べ、その一つの立場に立つ者が他の二つの教え方をどのように見なすか、自分なりの推測を加えてみよう、ということばで本筋に入る。

Silent Way の立場は、学習者の「自己」(Self)を孤立的・独立的なものと見なす。またそれは、自分が自己を知り、その結果自己を形づくるようになる時に、自分が開発しうるすばらしい力のあることを、認識している。この突きつめれば極めて孤独な自己は、その成長とともに、自分の置かれた世界やまわりの他の自己たちに、それ自身の持てる何かを与えるようになる。そのような自己の集合は、おたがいどうしの間で、ある程度の共同社会(community)を達成することもある。

CLL の姿勢は、いくつかの点で、それとはまったく逆である。CLL も、個人を孤独なものと見なす。しかし、Silent Way が学習者の孤独さを強調して、それに直面させ、それを乗り越えさせるのに対し、CLL は、カウンセラーとしての教師の暖い、すべてを包みこむような支援を通して、その孤独さを軽減することから出発する。さらに、各学習者の孤独な自己は、他の学習者たちの自己と共同社会を発達させていくにつれ、いっそうの支援を受けるようになる。ところが、CLL の五つの「段階」(stages) を先へ進むほど、学習者の自己は他への依存が減り、ますます自立的になるのである。この二つの教え方はどちらの場合も、学習者のたどる道は、独立と共同社会の間を走るのだが、たどり方がまったく逆の方向なのである。

この二つの方法はまた、学習者がその道をたどる時に、進歩するためには直面しなければならないと見なすものの種類についても、異なっている。Silent Way は、少なくとも語学教師向けに書かれた著作の中では、主として認知的作業——むしろ認知的冒険——に焦点をしづり、学習者の自己はそれに立ち向かうとしている。それに対して CLL は、あらゆる種類の個人間または個人の内面

の作用に、より以上の注意を払っていることは明らかである。

Suggestopedia に関する経験は乏しいので、それについて言うべきことはあまりない。しかしながら、Suggestopedia は、伝達の周辺的な局面をひじょうに詳しく、明らかにしているように思われる。この分野は、CLL ではほとんど触れられていないし、Silent Way では完全に無視されているようである。Suggestopedia は、個人の学習者を、上で述べた共同社会と独立個性の道のまったく中に据える。(少なくとも最初のうち) この共同社会はお仕着せであり、合成されたものにすぎない。しかし、時が経つにつれ、この出来合いの共同社会の像が生きたものになる、というのが Suggestopedia の期待である。この共同社会に住んだ学習者がそのコースを終えれば、外界でもうまくやっていける準備ができている、ということが望まれている。

Silent Way の実践者は、Suggestopedia の教師が各学習単元の最初の数時間に行なう詳細な統制と不断の先導を、わが意を得たりと評価するだろう。また、Suggestopedia が学習者の潜在能力に絶対的信念を抱くところや、その能力を懸命に引き出して、驚くほどの学習効果を上げさせるところは、Silent Way の考え方と一致すると思うかもしれない。ところが、Silent Way の実践者は、Suggestopedia のやり方では、Silent Way が多くの時間をかけ、学習者の注意を引こうとした種類の事柄を、学習者が自力で学ぶ必要もなく、むしろ学んではいけないとされていることに、焦立ちを感じるだろう。逆に、Suggestopedia の教師は、Silent Way の教師が、伝達の周辺的局面のほんの一部を、ただ行きあたりばったりに利用しているだけだ、ということに気づくかもしれない。また、学習者が新しい材料を扱うのに際して、自分の乏しい知識だけに頼らされることが多いやり方に、びっくり仰天するかもしれない。このような状況は、少なくとも近視眼的には、自分だけで試行錯誤する不適切な、自信を失いがちな学習と思われ、「喜びと容易さ」の代わりに、生まじめ一本槍で、時折生じる挫折感をスペルタ式に容認しなければならない学習、となってしまう。

Silent Way と Suggestopedia のもう一つの目立つ相違は、前者が一度に一つの素材だけを実に細心に提示するのに対し、Suggestopedia の対話では、新しい材料をあふれ出るほどふんだんに与える、というところにある。

Silent Way の教師は、CLL の学習者が、できるだけ独立するように強制されることはないなく、必要であるかぎり、好きなだけ他に依存することを許されている、

ということに気づくだろう。「古典的な」Curranの手順の第一段階で、学習者たちが始める会話にはかならず、新しい困難な学習事項が次々と現われてくるが、Silent Wayの教師からすると——否、構造の難易度の分類と段階づけに関心のある教師ならば誰にとっても——、この時期の学習者たちには不適切と思われるだろう。しかも、この学習者たちは、単なる語学の学習者としてだけでなく、人間としておたがいに交流しているのである。この交流が彼らを、不必要的雑念と不安にさらすことになる。最後に、ごく初步の会話さえ、余分な語彙が多くて、目標言語のより基礎的な部分の学習に費やされるべき精力が、浪費されてしまう。だから CLL は効率の悪い学習方法である、と Silent Way の教師は考える。

CLLのカウンセラーとしての教師は、自分の立場から、Silent Way は学習者に明けっぴろげの勇気を要求するが、少なくとも初步の段階では、多くの学習者にとってむりな要求である、と感じるであろう。それはまるで、学習者に CLL の第四段階から始めろと命令するようなものだ。カウンセラーとしての教師はまた、Silent Way の教師仲間が主張する「先導」の度合いと、一部の Silent Way の教師が示す冷淡さに、焦立ちを感じるだろう。最後に、少なくとも初步の段階では、Silent Way は脳の緊張度を高めすぎる、と感じるであろう。

Suggestopedia の教師は、CLL の教師のほうが Silent Way の教師より伝達の周辺的局面をうまく利用している、しかしながら、その点で自分がしていることにまだほとんど気がついていない、と感じることだろう。CLL の二つの点、つまり、固定した教材がないことと、学習者がコースに対する自分たちの反応を語る機会を設けることは、学習者の時間を浪費し、注意の集中を妨害し、(最も悪いことに) ひじょうに重要な教師の権威を低下させるので、好ましくないと思われるだろう。はっきりした授業の構成がないことや、教師の融通性がききすぎることは、一部の学習者に新しい種類の不安を生み出し、それは、せっかく CLL がうまく取り除いた以前の不安に劣らず、取り除くのが困難で、破壊的作用を生じる。

これとは逆の方向から見て、CLL の教師は、Suggestopedia の雰囲気が学習者の不安の一部を麻痺させ、中和させるという点は認めるかもしれないが、それによって、学習体験全体に何か欠けるところが出たりしないか、という疑念を抱くかもしれない。

Stevick によれば、以上の所見は 1 年前に書いたものだが、自分の意見はほとんど変わっていないという。つまり、これら三種の方法はどれも、わくわくするところが

あり、多くの可能性を秘めている反面、危険な面もいろいろ含まれている。Silent Way は、優雅なところもあるが、いかめしいところがある。CLL は人間的な暖かみはあるが、制御するのがむずかしい。Suggestopedia は強力そうだが、複雑で使いにくそうである。どれもが、我々のなじみの教授法とは、ずれたところがある。

満足な成果を生み出すためには、ある程度熟練した教師の技能がかならず必要とされる。上の三種の新教授法は、既存の教材に全面的に頼ることは反対だが、既存の教材から離れれば離れるほど、教師への要求が大きくなる。したがって、これらの方法を用いる教師は、極めて高いレベルの技能を必要とし、しかもそれを日々維持しなければならない。

真に資格のある教師は、洞察力と専門的技術と克己心のいずれをも備えなければならない。Stevick にとっては、その中で最も重要なのは洞察力であるという。洞察力がなければ、教師は、その状況に適切な教授法と教材を選ぶことができない。その選択や、それらをうまく使う技術は、次の問題である。しかし、克己心がなければ、技術も空虚な名人芸にすぎないので、学習者の目は引きつけるが、彼らを解放することはできない。この点こそ、つまり、学習者の目標言語の技術習得と並行して、学習者の解放を目指していくところにこそ、三種の教授法の共通な目標があるのである。この二つ、つまり学習者の解放と学習が、おたがいに強化し合うものであるという認識こそ、三種の教授法が共に明示している点である。このあたりに Stevick の結論がある、と考えてよからう。

なお、話のついでに、Stevick は本や論文の題名にかなり凝ったところを見せるだけでなく、いろいろなところに独自の才能を披露する人物である、ということを申し添えたい。例えば、この本の感謝の辞 (Acknowledgments) のところ (pp. vii–ix) で、彼は世話になつた同僚や学生の名前を表しているが、何とアルファベットの逆の順 (Y から始まり A で終る) に並べている。また、彼は独特的筆跡 (handwriting) で知られており、自筆の詩集などもあるのだが、この本の短かい序文 (p. xi) と結語 (p. 297) の大部分が、見事な自筆で書かれている。さしつけ西洋式「書道」(calligraphy) というところか。なお、前著の表紙や中扉にある *Memory, Meaning, & Method* と副題、それに彼の名前も、やはり自筆であった。訳書でそのことが触れられてなかったのは、極めて残念である。

(南山大学教授)

新	刊	書	評
I	II	III	IV



『新しい英語学習指導』

太田朗・伊藤健三・伊藤元雄・
下村勇三郎・渡辺益好共著
リーベル出版, A5判, 255頁, ¥1,900

名 和 雄次郎

1976年創立20周年を迎えたELECは、その記念事業の一環として「教材・教授法研究」を研究グループの1つとして発足させた。今回この4年間にわたる研究の成果が本書にまとめられたわけである。幸いELECは中学・高校の英語教員の研修のための講座を設けている。受講された先生方の意見を聞き、実験もしてもらって練り上げたのが今度提唱している指導法である。これは研究活動の一応の成果、いわば中間報告的なもので、読者の批判によってさらに改善されてゆくべきものであると「はしがき」で述べられている。

第I章は「わが国における英語学習指導法の歩み」(11ページ)と題して、かつて「教授法」と称したもの歴史を概観し、今後の学習指導法のあり方を展望している。長崎におけるフェートン号事件がきっかけで始まったれいめい期から始まり、外山正一や岡倉由三郎の教授法に代表される第II期、バーマーを中心とした英語教授研究所がOral Methodを提唱した第III期、戦後のOral Approach(以下OAと略す)の第IV期、それらすべての流れが、この章のまとめにある「当面の課題と今後の展望」に集約されてゆく。そして指導内容面では言語材料面の偏重と批判され、技術面では構造型中心という批判を受けたOAが、謙虚な姿勢で自ら改善を試みた方向が打ち出されている。すなわち、「blind mim-mem」とか'mindless pattern practice'などの批判に答えて、生徒の自発的な心的活動を促し、学習した英語が実際的使用に結びつく指導法を志向して研究を進めてきた成果が、今回のOAの大きな特徴となっていることがわかる。

第II章から第IV章までの約30ページにOAの基礎理論

がわかりやすく解説されている。第II章は「OAの言語学的基盤」という題で、A.ではアメリカ構造言語学の基底概念である対立関係に基づく言語観とその目標、B.の言語記述では言語体系の最小単位としての音素と形態素が扱われたあと、「pattern」とは何かという問題が英語教育の観点から考察され、位置づけられている。

第III章の「OAの特徴」は、A. 学習の第1段階における目標 B. 教材面での特徴 C. 指導技術面での特徴、から考察される。OAが目標とするものは学習の第1段階、すなわち高校の「英語I」程度までの基本的な言語材料について完全に口頭で運用できるようになることである。この目標を達成することが、英語学習の最終目標、英文読解、英語会話などのいずれを問わず、時間的にも経済的で、もっとも効果をあげることになる、と言うのである。そのためには、教材面では日英両語の音体系および構造上の対照研究の結果に基づいたものを使用しなければならず、その配列はパターンの対立を連続した小さざみなものにして学習させなければならないと説いている。

第IV章「OAに対する批判」では、A. Patternの対立の利用 B. 言語学的側面の偏重 C. Pattern Practice D. 言語学習は認知学習か習慣形成学習か、という項目で、從来誤解されたり、十分理解されていなかった面に焦点を当てた理論的な考察がなされていて、新しく提唱されたOAによる学習指導法の理念が再認識できるようになっている。

第V章「中学校の英語学習指導」と第VI章「高校の英語学習指導」がいわば実践篇(約110ページ)である。前者が A. 入門期の指導 B. 中学校の Teaching Procedure C. 中学校指導案の具体例、後者は A. 中・高の英語教育を繋ぐもの B. 高校の Teaching Procedure C. まとめ D. 高校指導案の具体例、という下位項目で構成されている。先の理論篇の主張がこの指導手順に具体化されているわけで、まず、中・高とも1時間ごとの主な学習作業は次のようになっている。

- A. Review
- B. Presentation of the new items [materials]
- C. Reading
- D. Oral Practice [Practice]
- E. Consolidation (注)〔〕内は高校の場合

これは全く一般的、標準的な指導過程であるが、過程の細案を見ると、かつてのOAの手順とかなり変わっていることに気づく。

まずReviewではListening Comprehension, Reading, Oral Practice, Writingの作業がある。ListeningもReadingも前時の内容を想起させるもので、状況によってど

ちらかを選択するのもよい。Oral Practice は (a) Pattern practice と (b) Language use practice の 2つの活動がある。(a)は文脈・場面を十分に考慮した 'meaningful' なものでなければならぬものであり、(b)は言うまでもなく実際の運用につながる言語活動である。両者を有機的に連結する具体的な作業例として、本文の内容についての Controlled conversation, (本文の応用としての) 身近なことを話題にした問答, Role-playing, Dramatization, Retelling などが解説されている。従来の Pupil-pupil dialog よりねらいがはっきりしていてわかりやすい。Writing も従来は Written test だけに限定されていたようだったが、今度は Dictation, Summary writing, Cloze test など多彩な言語活動が用意されている。

Presentation には、1. Oral introduction 2. Practice: (a) Aural drill (b) Mim-mem [(c) Pre-reading questions高校] とある。従来の Defining sentence を用いた口頭導入法はとくに構文中心型に始終するきらいがあつたので、今回はもっと場面中心型の具体例もあげてほしかったと思う。Practice のところは、従来ならすぐ mim-mem に入ったものだが、ここでは aural drill を入れて、生徒自身に類推力を働かせることを促し、内在するルールを発見させる機会を与えていた。受容する生徒の思考・理解の過程に視線を向けた意義は大きい。

Reading は、1. Reading for comprehension 2. Reading aloud with comprehension に大きく分かれ、最初に理解のための読みをやり、その上での音読というステップを踏むのは当然であろうが、1の作業はさらに (a) Silent reading (b) Model reading [(c) Explanation of some important words, phrases, and structures (d) Interpretation of the text高校] となる。従来見られなかった silent reading をここに位置づけたことは画期的なことであろう。口頭で導入されたものをよりどころにして生徒自身が主体的に内容を把握する態度を身につけさせたいためだと言う。いくら音声を重視する OA とは言え、のべつまくなし発声しているような状態では生徒はロボット化し、自らの思考力を働かせることを忘れてしまう。そこに能動的な心的活動の機会を入れることは卓越した試みとして歓迎したい。また、高校の Interpretation も読むことの言語活動として「内容を解釈する」活動を重視したもので共感を覚える。

Reading のあとに、いま読んだ内容を再認識し、記憶の定着をはかり、言語活動へと発展させてゆくための Oral practice: 1. Pattern practice 2. Language use practice がある。そして最後にまとめとしての Consolidation でしめくくる、というのが今度の Teaching pro-

cedure である。

全体をとおして見ると、新出重要事項が作業の方法を変えて幾度も繰り返して学習するようになっているが、覚えるということが必須の英語学習においては非常に効率のよい学習法であり、週3時間というまるで忘却のためにあるような学習時間への対応策として有効に働くであろう。もちろんすべての手順を漏れなく踏むわけではなく、教材の性質に応じて弾力的に扱われるべきものである。その見本として、中学の指導案4篇、高校の指導案3篇、それぞれ解説つきで載せられているのは非常に貴重である。欲をいえば、教材の精選、概要・要点中心の指導の仕方をもっと解説してほしかったと思う。

第Ⅷ章「OA をめぐる Q & A」(12ページ)は、現場の先生方から寄せられた質問16項目で、要点(?)をついておもしろい。

第Ⅸ章「必読書の解題と基本図書リスト」(17ページ)は斯界の専門家38氏の推薦書、うち10点には1ページずつの解題がついている。

あとがきとしての「研究のまとめ」(8ページ)は研究員の座談会で、研究経過、本書の構成と特徴などが話されていて、本書を読む指針にもなる。

巻末には付録として、教育課程審議会の審議のまとめ、学校教育法施行規則、中学および高校の学習指導要領が抄録されている。ほかに引用文献表と索引がある。

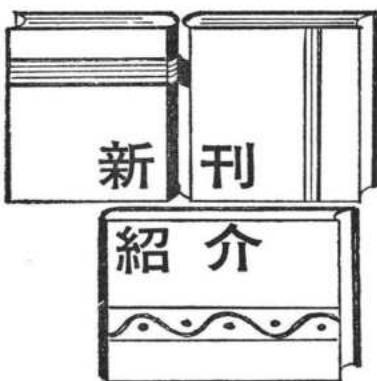
本書を読んで、OA もフリーズの手を離れて日本人の手による指導法にまで育ったという感じを深くした。極めて 'eclectic' な指導法であると思う。中学の先生方はもちろんのこと、57年度から中・高を繋いだ「英語 I」を教えねばならない高校の先生方にとっては最良の参考書になってくれるはずである。(国士館短期大学助教授)

(p. 46 よりつづく)

中学生を相手に限られた時間内で、多くの生徒を一斉指導している今日の日本の入門期指導では、いろいろの反省が跡を絶たない。正しく文字が読めない、書けない、語りに乏しい。それらに対してフォニックスの指導法は、例外よりも規則性に目を向けさせ、早くから英語のつづりの表音性に着目させるようにすすめ、正しい音声と結びつけて単語のスペリングを習得させることをねらって、フォニックスによるひと目読み方式 (Look-and-say Method) はどうかと提案する。示唆に富んだ多くの事例と資料は、入門期の英語教育について改めて考えさせ、大きな糧を与えてくれる。

(日本ブリタニカ刊、A5判、248頁、¥1,500)

(東京都千代田区立麹町中学校教諭 石津谷 進)



■『表音小英和』

三省堂編修所編

この辞書の最大の特色はその発音表記法と機能語の扱いにある。本書はいわゆる学習辞典ではない。社会人のための実務辞典である。社会人はどんな時に辞書を引くだろうか。外国語の場合は単語やフレーズの意味を知るために引くことが最も多いと思われる。よく4技能ということが言われるが、一般の社会人にとつて英語は何よりも読むものである。とすれば、英和辞典にも読書専用のものがあっていいのではないか。

新聞や雑誌を中心とする日常の読書で英和辞典のやっかいになるのはいわゆる内容語の意味についてである。いわゆる機能語の意味を求めて辞書を引くことは成句以外ほとんどないと言ってよい。したがって読書専用の英和辞典には前置詞、代名詞、基本的な数詞などは載せなくてもいいことになるが、本書はそれを大胆に実行しているのである。

読書専用であれば発音表記はなくともよいのではないか。一瞬そのような考えも浮かぶかもしれない。しかしながらの聴覚映像なしには単語を記憶することは不可能であろう。だが社会人ともなれば英語の發

音の基礎は良きにつけ悪しきにつけ固まっていることであろうから、ちょっとしたヒントがあれば、その人なりに(正しく)発音できるはずである。多くの場合、見出しと同じかそれ以上のスペースをとる一般の英和辞典の発音表記に代わるものはないだろうか。『表音小英和』が採用したのは基本的にCODの発音表記法で、macron, breve, dotをつづり字に直接つけて示すやり方である。日本はCODにとって世界最大の市場の一つであろうが、なぜかその発音表記法はまだ受け入れられていない。個々の音の示し方については改善の余地があるが(例えば breve の使用を減らすあるいはやめるということ)、私は原則としてこの表示法を支持する。自分の英語は乳離れしたと自負する社会人各位に『表音小英和』をおすすめしたい。

(三省堂刊、154×82mm、458頁、
¥950)

(東京外国语大学教授

松田徳一郎)

■『英語と日本語と—林栄一教授還暦記念論文集』

林栄一教授還暦論文集
刊行委員会編

本書には、久野暉、黒田成幸、柴谷方良の3氏による特別寄稿の他に、20篇の論文が収められている。これらは、戦後35年にわたる林教授の学問と教育における幅広い活躍を反映して、英語と日本語を対象とする音声学、音韻論、語彙論、統語論、談話文法の諸分野にわたる研究成果である。全巻を通して見る時、理論と分析方法の両面において画一的ではなく、言語現象を直視しつつ、自由に議論を展開しているものが多い

のに気づく。紙数の関係で網羅的な書評は不可能なので、以下気つくままに本書の特色と考えられるものをあげてみよう。

モダリティと文構成の問題に関して、寺村秀夫「ムードの形式と否定」、中右実「モダリティと命題」、仁田義雄「日本語文の表現類型」の3篇が収められている。これらは、それぞれの研究内容のみならず、言語学、日本語学、国語学を融合して新しい知見を得る可能性を示している点でも、注目に値する。

好田実「英語における名詞構文—日本語との比較」など、日英語間の翻訳に関する問題点や日本人と英米人による訳文の違いを、日英語統語法の差異として論じたものが2、3篇ある。いずれも手がたく収集された質のよい資料を提供して、両言語の特徴を印象的に示し、語学教育にも大いに役立つであろうと思われる。生きた言語研究のためには、このような質のよい資料が必要なことは言うまでもないが、理論が与えられてはじめて、それらの底に流れる一般性が見えてくるのであって、資料のみからの一般化は危険であるといふ認識は必要であろう。

語彙研究では、影山太郎「語彙的表現と迂言的表現」が語彙論と統語論の接点を扱っていて興味深い。

談話文法を扱った3篇のうち、黒田成幸「(コ)・ソ・アについて」は、緒についたばかりの談話文法研究に1つの指標を与えたものである。右方転位文を扱った西光論文もよい点をついている。

統語論については、比較文の派生に関わるのはWH-移動か削除規則かという議論において無視されてきた各種の比較文にメスを入れた久野暉「比較構文の構造」をはじめとし、約10篇の論文が寄せられている。その中で着眼点のよい論文とし

て巻下吉夫「WHEN とその逆転性について」を、日本語に特徴的な問題を英語との比較において論じたものとして益岡論文をあげたい。日英語の対照研究には、各言語における当該の構造、範疇などについてさらに掘り下げた研究や、同種の要素との比較が必要であり、現段階では物足りなさは残るが、これらの研究を基礎にした将来の発展に期待したい。言語類型論に対する柴谷論文も本書を広い射程の中に位置づけるものである。

紙数の関係で列挙できないが誤植がかなりあり、330頁の後に来るべき335頁～338頁が転倒しているのは残念なことである。

(くろしお出版刊、A5判、458頁、
¥6,000)

(国際基督教大学教授 井上和子)

■『英語学大系 8：英語史 I』

小野茂・中尾俊夫共著

本書は、これまでわが国で出版されたうちでもっとも広汎な古英語(Old English)の体系的記述を意図したものであることは容易に推察できるが、残念ながらこと志と反し、はっきり言って余りにも不満足な結果に終わっている。

共著とは言え、中尾氏の分担は1.古英語概観 2.アルファベット・綴字 3.音韻論 4.方言 5.形態論 7.語彙論 8.韻体論(このうちのある項目については完全なミスキャストで殊に語彙論はひどい)に及び、これに対し小野氏の分担は 6.統語論 9.文体論だけである。これでも共著は共著なのであろうが、この分担の振り分けを見ても、中尾氏の音韻論と小野氏の統語論が中心であることはすぐに察しがつく。

中尾氏の音韻論といえば、生成音韻論によるものであることはいうまでもなく、目下のところ通時的研究に生成変形文法を適用して成果を挙げているのは音韻についてだけであるということを中尾氏自身が実証しておられる。小野氏の統語論は、みずから集めた資料にもとづいて伝統的な立場で記述された労作である。しかし全巻を通じて両者の方法論的隔差だけが浮き彫りにされる結果となったのは惜しい。

本書についてもっとも困るのは、中尾氏の分担の項目に初步的な誤りが多く、これではとても学生にすら奨めることができないということである。第一に、本書の最初の書き出しが意味をなさない。「450年から1150年ごろまでの書きことば」を扱うしながら、すぐに「文献が現われ始める700年…」という記述が現われる。「英國で最初に用いられた言語はおそらくケルト語(Celtic)であった。」という記述がすぐそのあとに続くが、果たしてそう断言できるのか。p.6 Tryggvasónとはなんのことか。察するに中尾氏はONのことは余り御存知ないらしい。また言語の再建についての記述も怪しく、Proto-Old English(p.3)とAnglo-Frisian(p.8)の関係もあいまいである。同じく「East Gmc, North Gmc, West Gmcの三言語が発達した」(p.9)の「三言語」とはなにを意味するのか。p.8のIEの枝分かれ図も賛成しがたい。もっとひどい初歩的誤りはæとð[eð]がルーン文字に含まれているという記述(p.14)である。どこまでもæはaとeのligatureであり、ルーン文字[æʃ]の呼び名を借りただけである。ðはルーン文字にはない、等々。

結論として、一日も早く本書の改訂版が出て、つまらない誤りを一掃してほしいと望むのみである。

(大修館書店刊、A5判、xxxii+710頁、
¥4,900)

(東京都立大学教授 松浪 有)

■『入門期の英語教育』

一発音とつづりの同時指導

長谷川 潔編著

この『入門期の英語教育』はTeaching English with Phonics—発音とつづりの同時指導——という副題からも推測されるように、フォニックスによる入門期の英語教育を紹介することによってわが国の英語教育の入門期のあり方に一つの示唆を与える書と言える。

今日までわが国の学校教育では、中学校から外国語(英語)を修得させることで生徒の資質を高めることに役立ってきたが、その成果はじゅうぶんとは言い難い。特に国際交流の盛んな今日、中学以前での外国語教育が現実に具体的な問題となってきている。それだけに、日本人の子供にどういう英語教育をするかの問題は、当面の教育問題とも言える。

本書は、英語を母国語とする国々で、入門期の英語教育に大きな役割を果たしているフォニックスによる指導の理論と方法を、日本の現実に合うよう、日本の小・中学生を相手に実践した経験をふまえて紹介しており、同時に役に立つ貴重な資料を数多く提供している。構成は6章よりなり、第1章ことばの背景—日米言語教育の比較から、第2章日本における基礎英語のすすめ、第3章音読み指導による早期英語教育、第4章音読み指導による中学校の英語教育、第5章フォニックスを始める人のために、第6章日本でも利用できるフォニックス—TV番組と教材、となっている。(p.44へつづく)



★『アメリカで短期間暮らす法』大石五雄著、四六判、238頁、980円、オーネス出版

書名が面白いだけではない、細大もらさず自分の体験をもとに情報をを集めている。アメリカは決してパラダイスではないが、自分の目的をもって日本ではできない体験をして来ること、そして感謝の気持を忘れずに人間としての勉強をして来るようすすめている点を買う。アメリカに留学を志す人達には勿論短期の旅行者にも役に立つ親切で便利な手引き書である。

★『コミュニケーションギャップ—英語表現のホンネとタテマエ』G. W. スミス著、武田勝彦・松本洋一郎訳、B6変型判、232頁、1,000円、荒竹出版

vertical な日本文の上に horizontal な英文が1行というスタイルに興味を覚えた。一見単純に見える表層構造も、こんな深い non-verbal な構造から生じたものであるとすれば、うっかり外国人は口説けないということを思い知らされる本である。

★『学習者中心の英語教育』羽鳥博愛・松畠熙一著、四六判、263頁、1,300円、大修館書店

豊富な現場の経験から生まれた指導書である。教育心理学の立場から、これから英語教育が学習者中心に切り換えられねばならないことを力説している。そのため生徒の実態を把握し、彼らの関心がどこにあり、どこにそのつまづきがあるかを、アンケートの結果を整理して摘要もうとしている点など、評価できる。

中でも①学び方の自己発見をさせること、②誤りは常に訂正するのではなく、目的をもってするとか、③生徒と教師のつながり、④内容把握と要約の必要性など、日常の自分の姿を反省できない教師に、反省の機会を与えてくれる本である。

★『英語教育のアイディア—教壇のしるべ』橋健著、四六判、186頁、1,200円、大修館書店

英語に一生を捧げた一校長の学校運営の立場からの英語教育に対する実践論である。週3時間時代をいかに乗りきるかの具体例、英語学習と生徒の IQ の相関、外国人の日本語テストの具体例から見た入試のレベルの問題、入門期の指導法の具体例、教科書への注文など文字どおりの教壇の道しるべである。ただ念のためにつけ加

えたいたが、55頁の intonation contour は ②I ③drink①, ②I ③drank①, ②I will ③drink① と will に stress を置かないように訂正されたい。

★『クロース現代英語文法』R. A. クロース著、斎藤俊雄訳、A5変型判、258頁、2,000円、研究社出版

これは R. A. Close の *English as a Foreign Language* の訳書である、しかも懇切ていねいな訳書である。Randolph Quirkなどを着想からヒントを得たという原著者の考えを伝えることに苦心のあとが見られる。はじめの方は訳文が少し固くなりすぎたきらいはあるが、原文の略図などもそのまま取り入れ、説明は明快である。p. 182 の [40] のような文章は colloquial ではないが、「日なたに立っていると、目まいがする」ぐらいの意味ではなかろうか。

いずれにしても翻訳の苦労は並大抵なものではない。特に大学の教養課程あたりで取扱うのに手頃な訳書である。

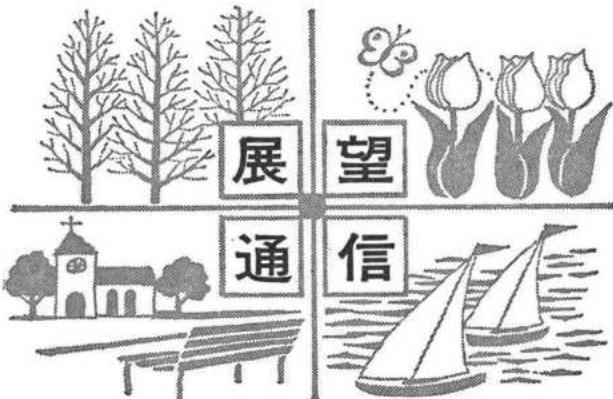
★ *Intermediate Comprehension Topics* L A Hill・川辺俊一共著、四六判、60頁、400円、カセットバック（カセット2巻、テキスト、解答書）5,000円、オックスフォード大学出版局

構成は 1. Words and phrases 2. Useful dialogue 3. Story 4. Exercise (A. Choose the correct answers B. True-false statements C. Grammar D. Put into Japanese E. Dictation) となっている。すべて Received Pronunciation なので、米音のみの経験者にはやや聴きとりにくいところもある。しかしこれくらいの British English を聴きとる能力がなければ、米語の方も当てにはなるまい。という意味ですべての高校初級生に格好の聞き取りの教材と言えよう。ただ dictation の部分で()の中に leading letter が入れてあるのは、あまり親切すぎるのではないかろうか。

★『イギリス、君のイギリス—英国再発見』杉恵惇宏著、四六判、229頁、980円、北洋社

あまり長く外国に滞在すると、身も心もその國の人間になってしまふものらしい。著者は1973年から毎年のように短かい訪問をくり返し、1977年3月から1年間滞在したというからそれほど風土が身にしみ込んでいない方だろう。その意味で日本人の体をとおして見聞した隨筆である。

ことばは文化の理解なしに理解できないと言われるが、軽妙な筆のタッチで書かれていて読みやすい。巻末にイギリス関係書誌も付してあり、風物の研究者には参考になるだろう。特に日本人ばかりしていない好奇心でとらえた点が読者を楽しませる。



◆JALT, East Kansai 支部10月例会

日時 10月 5日 (日) 午後 1時—4時30分
 場所 同志社女子大学デントン館205教室
 講師 直塚玲子氏 (大阪府科学教育センター)
 演題 "Cultural Aspects of Language Learning"
 会費 会員無料 非会員 1,000円
 問合せ 小田幸信 (京都市上京区今出川通寺町西入ル
 玄武町602同志社女子大英文研究室 電話 075-
 251-4151, 4156)

◆第30回全国英語教育研究団体連合会大会

期日 10月11月 (土), 12日 (日)
 会場 富山県民会館 (11日)
 富山大学教養部 (12日)
 日程 10月11日 講演「文学と語学」佐伯彰一氏 (東
 大教授) : 「題未定」Miss Pauline Robinson(ICU
 講師) / 授業実演=富山市立水橋中学3年生 教
 授者 斎藤一朗氏 (同校教諭) : 県立富山高校
 2年生 教授者 椿秀年氏 (同校教諭)
 10月12日 分科会
 問合せ 〒939-11 高岡市戸出町3-4-2富山県立高岡南
 高校内全英連富山大会事務局 (電話0766-63-02
 61)

◆JALT 西関西支部10月例会

期日 10月19日 (日)
 場所 Umeda Gakuen
 講師 Johanes H. Tahara
 演題 "Pronunciation and Phonetics-Differences be-
 tween Japanese and English"
 会費 会員無料 非会員 1,000円
 連絡先 Jim White 0723-65-0865 ex.293(day), 0723-
 66-1250(night); Fusako Allard 06-315-0848;
 Jan Visscher 078-453-6065

◆第16回 ELEC 英語教育研究大会

期日 11月 1日 (土)

会場 ELEC会館 (千代田区神田神保町3-8)

問合せ 〒101 千代田区神田神保町3-8 英語教育協議
 会 (電話03-265-8911)

◆JALT 語学教育国際大会

JALT (Japan Association of Language Teachers) は第5回語学教育国際大会 (JALT International Conference on Language Teaching/Learning '80) を、11月22日 (土), 23日 (日), 24日 (月), 南山短期大学において開催する。参加希望者は Paul G. LaForge (〒466名古屋市昭和区隼人町19 南山短期大学 電話 052-832-6211) 宛連絡されたい。

◆SLANT Newsletter 実践研究原稿募集

SLANT (Second Language Acquisition Notes & Topics) Newsletter は、第二外国語教育にたずさわる人々を対象として、サンフランシスコ州立大学 English Department の監修のもとに年間2回 (春季号・秋季号) 発行されているが、この分野における最新の研究成果・情報交流促進のため、実践研究等の report を募集している。詳細については、Judith Chun (Box 2651, Stanford, California 94305, USA) 宛問合せられたい。

《編集後記》

■小学校2年生の男の子の話である。彼に与えられた夏休みの課題はヒマワリの生長記録をつけることであった。小さいながらも美しい花を咲かせたヒマワリを見た日、その子は「いまに蜂が飛んで来るのだ」と観察日記に記して得意顔であるが、母親は「だから理科の成績が悪いのよ」とあきれ顔である。この観察記録、はたしてどう評価され、またどう評価されるべきか。気にかかる毎日である。

■本号から編集を担当することになりました。未熟ではありますが、本誌の内容をより一層充実させるべく努力したいと思います。皆様のご意見・ご要望をお待ちしております。

(美光)

英語展望 (ELEC Bulletin)

第71号

定価 580円 (送料120円)

昭和55年10月1日 発行

◎編集人 朱牟田夏雄
 発行人 酒井杏之助
 印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 エレック出版部 (財団法人英語教育協議会)
 東京都千代田区神田神保町3の8
 電話 (265) 8911-8917
 振替・東京3-11798

ELEC BULLETIN

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC